

再生　く月と海とく

一章　プラナリア

1　おなり

まず、自分の事から話そう。三十三才、妻帯者。子供は一人。女の子だ。五才。とても可愛い。名前は歩^{あゆみ}。

三十歳の時、M県に八十坪の土地を買い、家を建てた。空気はよいし、子供の環境も抜群だ。ジャスコも、シネコンもある。その代わりに往復4時間の通勤時間と終身ローン。

M県から出発して、N県を通過し、O市の勤務先につく。どこが県境か知らないけれど、M県からN県への車窓は自然が一杯。渓谷と清流、広がる田園、奥深い山を通り過ぎる。時々霧がかかると中国の水墨画のような風景になる。旅行なら、歓声上がるだろう。だけど、僕にとっては、単なる景色だ。

「毎日が小旅行ですね」

からかい半分でよく言われる。窓の外が突然真っ赤に紅葉していたり、雪景色になっていたりして、感嘆する事もあるが、殆どの時間は眠っている。

次に僕の仕事について話そう。

K薬科大学5階にある薬剤学研究室。大きな窓。実験台が2つ。乱雑に並べられた実験器具。薬品棚。後ろにサントリーのたるまが一本忍ばせてある。薬品で所々に穴の開いた白衣。仕事をしているという勲章。

僕は薬剤学の助手である。仕事は、学生実習の準備と後片づけ、講義の出席取り、黒板消し。そして研究。その順番だ。

去年一年間、K大の研究室に通った。同じKでも国立のK。講師になるためには学位が必要だった。僕が講師を望んだんじゃない。三十を超えて助手というのはなあと、教授が気を遣ってくれた。自分の研究室の世間体も当然ある。いくらほんやりしていてもそれくらいは分かるよ。僕は全然助手でもOKだった。その方がよかった。

僕はK大で「おなり」って呼ばれた。

教室に入っていくと、一斉に、「おなりー」と声上がる。一種のイジメなんだ。「私大の馬鹿がやってきたぞ」。「馬鹿殿のおなりー」。初めは何のことか分からなかった。分かっても腹なんか立たなかった。偏差値が年齢差ほど違うんだから。

そこでの研究テーマがインシュリンの経皮吸収。出来ないことをやってみることについては少しも変わらない。だが最近あの研究室は、動物実験の段階だが、皮膚に埋め込むバイオ人工膵臓という画期的な方法に成功した。モルモットにせつせとインシュリンを塗っていた僕はやはり「おなりー」だと思う。そして、まだ、助手のままだ。

校庭に赤とんぼが舞い始めるとやがて夏は終わる。この時期に飛ぶ赤とんぼを盆トンボ、精霊トンボというらしい。夏の中に秋が息づき始める。

九月一日。

蝉の声がびたりとやんだ。耳を澄ませても、全く聞こえない。昨日は、羽を枯らした飛べない蝉を何匹も見つた。一昨日は、ツクツク法師がなくての聞いた。

九月二十日

前期の試験が始まる。三十度を超す暑い日もある。でも、夏はほぼ死んだ。

九月二十五日

遊びに来る学生もいない。でも、ラグビーの練習はやっている。試験に余裕があるのか、諦めているのか、多分後者だろう。

試験の監督がない時は、暇だ。バーナーで加熱している坩堝るっぼを、無表情に時々眺める。何を溶かしていたんだっけ。あくびをする。時間がゆっくりと過ぎて行く。

九月三十日。

今朝は朝から雨が降っている。

雨の中で、ラグビーの練習をやっている。

今日も時間がゆっくりと過ぎて行く。

電話のベルの音が鳴った。机の上に転がっている受話器（子機）を取る。教授の大声が耳に響いた。思わず電話を耳から三十センチ遠ざけた。

「直ぐに部屋に来てくれ」

受話器を持ったまま、バーナーを止め、窓際に移動する。グラウンドを見下ろす。雨の中で、ラグビーの練習をする学生が僕に気づき、手を振る。僕も笑顔で応える。僕はラグビー部のOBで、そして、もっとも熱心な部員でもある。

僕の返事も聞かずに電話は切れていた。思い出したように部屋を

見渡すと、そこは、シーンとした様々な物が雑然と肩を寄り添わせている。フラスコ、コルベン、液体クロマトグラフィー、ガスクロマトグラフィー、微量天秤、カラム。僕もその中の一つになったような気がする。秋は何時もそうだ。夏も冬も含んでいる。春はその予兆さえない。僕は何時と同じ季節にいる。春の出来事も、夏の出来事も、冬の出来事も、記憶に変わると、同じ季節になる。

部屋を出ると、メールボックスに僕宛の手紙が入っているのに気づいた。個人宛の手紙は珍しい。木製の小物入れに入っていたような茶色の薄い封筒。だが、と、僕の思考が止まる。木製の小物入れなど何処で見たのだろう……。思考がまた動き出す。僕は手紙をメールボックスから抜き取り、差し出し人を見た。

香川県丸亀市月島八浦、鈴木昭彦、

知らない住所だ。行ったこともなく、そこにいる知人も思い出せない。差し出し人の名は、頭の隅っこに少し引つかかった。だが、明確な像を結ばない。もう一度、宛名を確認して、白衣のポケットに、手紙を押し込んだ。

長い廊下を歩く。ドアの隙間から、過酸化水素のにおいがしみ出してくる。学生の姿はない。不思議と誰とも会わない。靴の音だけが単調に響く。エレベーターで三階の教授棟に降りる。また、長い廊下を歩く。空気が湿っている。僕の影だけが動いている。

一番奥の部屋のドアをノックする。

「どうぞ」という声と殆ど同時に僕はドアを押ししていた。教授は、机の上の印刷物を忙しそうに束ねている。

「九時から教授会だ。年寄りは朝が早くて。要点だけを言う。ここ五年間、筆頭論文のないのは君だけだよ。K大で何をやってきたんだ。学生とラグビーするために来ているような奴は大学に要らないって言う教授もいるんだぜ」

そこで手を止めて僕を見た。

「後一年待つ。それでダメなら辞めてもらうしかない。もう、庇いきれんよ、日向。お前は万年助手で十分だろうがそうはいかないんだ」

いつもの小言に、僕は軽く頭を下げて、部屋を出ようとした。教授の言葉が僕を追いかけた。

「もう一つある。鈴木私の私物を処分するらしい。ロッカーを開けるから立ち会ってくれって教務が言ってきたんだ」

「鈴木？」

「薬理だけど、みんな忙しいだつてさ」

「暇なのは俺だけ」

「まあ、まあ、そうひがむなよ。そこまで一緒に行こう」

教授はせかせかと書類を袋に詰め込んだ。

棟から棟をつなぐ回廊を僕と教授が、並んで歩く。僕の肩までしかない頭がせわしく動く。

「木村が帰ってくるんだよ。国立の博士課程だから、講師、すぐに助教授だろう。あんたの何年後輩だ？」

「分からないですよ」と僕は興味なさそうに答えた。

「よく降るな」

教授が、二人の無言を埋めるように言った。

「ええ」

相づちを打つ。雨の中をラグビーの部員が走っている。

「分からない」

「？」

「わざわざ雨の中で」

「雨の日の試合もありますから」

教授が煙草を出す。向こうから女学生が三人やってくる。

「煙草は」

「ああ」

教授が煙草をしまう。女子大生がすれ違う。

「煙草も自由に吸えないのか」と教授はため息と一緒に言った。

「運動会、大丈夫かなあ」

教授の言葉を無視して、空を見上げながら僕は言った。

「運動会…。日曜日だろ」

「ええ、明日晴れば」

「いくつになつた」

「えっ」

「歩ちゃん」

仲人は教授だった。歩の名前を覚えていると感心した。

「五才です」

「可愛いかな？」

「そりゃ、もう」

「家庭第一だな、このごろの若いもんは」

「このごろの若いもんですか」

回廊を曲がる。取り壊し中の旧館が見えてくる。

「始まつたな」

「ええ」

「雨の日にやらなくてもいいのに」

「ほこりがたたないですよ」

旧館には、古いグラランドピアノがあつた。積もつた埃に、亀の甲が描いてあつた。ジアソ反応。これさえ分かつたら、お前らは卒業だと、S教授が叫んだあの反応式だ。僕は未だに分からない。ピアノ

ノの蓋を開けると、ナイフで彫られた落書きがある。確か「革命」と読めた。その横にすごく幼稚な字で、「そんなこと書くめい」と彫られている。そんなことをぼんやりと考えていると、教授が突然足を止めた。

「三十年か……」

僕も立ち止まり、旧館を見上げる

「あそこに閉じこもっていた俺が、今は、教授だもんなあ」

「……」

「戦争だった」

「戦争？」

「戦争ごっこかもしれないが」

「僕らに戦争なんかはないすよ」

「そうか。そうだなあ。戦争ごっこもないか、君らは。あの頃は自分一人でも社会を変えられると思っていた」

「社会ですか。すごいすね」

「そんなことを考えもしないか」

「ええ、全く」

教授は愛想笑いを浮かべる。この世代は、意味もない笑いを会話に挟む。団塊の世代って言うんだっけ。戦争も、飢餓も所詮他所の世界の事なんだ。僕には関係がない。通勤地獄、終身ローン、うるさい学生。徴の生えた教授。僕も結構戦争をしている。バンバンと銃を撃つ方が手っ取り早いかも知れない。とにかく先の事は考えない。明日の事は明日。一時、一時を、心地よく過ごす。そう、それしかない。

「あつ、遅れる」

腕時計を見ると、教授は走り出した。

「じゃ、頼んだぞ」と言っつて、一気に階段を上がった。

2 動物舎

薬理学教室の棟の近くに、動物舎がある。動物舎にはバイトのKがいる。背が低く、度の強い眼鏡をかけていて、ぼつちやりとした風貌で、少し足を引きずって歩く。昔、丸出だめ夫というマンガがあったらしい。あれとそっくりだと薬理学の教授が言っていた。教授が大昔の少年マガジンを持ってきて、な、な、そっくりだろうと得意げだった。なるほどそっくりだ。Kはスキャナーで取り込み、コンピューターの壁紙に使っている。スイッチON。丸出だめ夫が飛び出す。理由はともかく、自分が目立つのが嬉しいのだ。それだけではない、プリンターで打ち出し、動物舎の一番目立つ場所に貼っている。

Kには雌ザルの花子を強姦したという噂もある。

ドアをノックしても返事がなかった。ドアを開けると、強烈な動物臭が鼻を突く。通路のような部屋の奥で、テレビがついていた。

画面は時代劇。折りたたみのパイプ椅子に腰掛けたMがぼんやりとした目で僕を振り返った。

「やあ」

「やあ」

「何をしている？」

「ビデオを見ているんだ」

「時代劇か？」

「ああ、座頭市だよ」

シユ、シユと居合いのまねをする。寝めたら、多分歌い出す。

「およしなさいよ」

寝めなくても歌い出した。一頻り歌ったり、科白を言ったりした後、照れたように笑った。

「雨、降ってる？」

「降ってる」

「そう」

「時代劇が好きなの？」

「そういうんじゃないけど」

暫くの沈黙。雨の音が聞こえる。マウスがたてる小さな音も聞こえる。そこで、僕は気づく。座頭市が斬る。敵役が罵る。テレビからは音が聞こえてこない。別に音を消して、時代劇を観ては行けないと言う事はないけど、二人の間の沈黙が、テレビの沈黙に飲み込まれていくような気がする。

「時代劇って、観ていると、何かものすごく不思議な気がするんです」

「えっ」

「……」

「ごめん、よく聞いていなかった」

「時代劇って、観ていると、何かものすごく不思議な気がするんです」

「どうして？」

「ここにいる人って、もういないんですよ」

「勝新太郎は多分もういないなあ」

「そういう意味じゃなくて、役者さんが演じている人のことです」

「江戸時代だから、いないと思う」

「みんな死んでしまっているのに、ちよんまげ結った人が、動いているのがすごく不思議な気がするんですよ」

「よく分からないけど」
「江戸時代の人は、それが自分たちのリアルな時間であって、未来で、僕らが彼らの生活をこんな風に観ているなんて思いもしなかった」

「それはそうだろうけど」
「僕らだってそうですよ。僕らよりズーと先の人は僕らをきつとこのように見るのだと思う」

「そうかもしれない」

「それがどうしたんだって思っているんでしょ」
「思ってる」

「正直ですね。日向さんは」

「それだけが取り柄なんだ。雨、止まないね」

「ええ」

「日曜日が運動会なんだ」

「美人の奥さんと一緒か。いいなあ」

「君も、花子によく似た奥さんをもらえばいい」

「殺すぞ」

反射的にKが言った。

奥で何が、ガタンと動いた。一瞬雨の音も消えた。

「嘘」

雨の音がまた帰ってくる。

「嘘ですよ。コーヒーを飲みます？」

「ああ」

Kは立ち上がり、インスタントコーヒーを入れ始めた。

「インスタントコーヒーでもね、最初、少量の熱湯で溶かして、こうしてスプーンで練ってから、薄めたら結構いけるんですよ」

ここでコーヒーを飲むためには必ずこの科白を聞かなければならない。カチカチと、スプーンで混ぜる音と一緒に、

「さっきの話し続けていいですか」とKは言った。僕は、少し考えて、頷いた。

「僕はその時代にもいたかもしれないと思うんですよ」

「江戸時代に」

「ええ、ただ忘れてるだけで」

「転生……」

「そんなたいそうなものじゃなくて、元々、そんなもんじゃないかと。なんだか、あそこにいたような気がするんですよ」

Kは真っ直ぐに人差し指でテレビ画面を差して、そう言った。そして、続けた。

「それは、今という時間についても言えるんじゃないかなあ。ここにいる僕は、すなわち、僕自身が嘘だとしたら、本当の僕は他の所

にいて、ここにいる僕は、所謂、夢みたいなものだとしたら。元々、多分、嘘も本当もないんだと思うけど」

「それじゃ俺は」

「多分僕の夢でしょう」

僕は、それに答えずに黙ってコーヒーを飲んだ。

「こんなに雨の音がするに、どうして、雨が降っているかって聞いたの？」

「日向さんの耳に聞こえているか、確認したかったんですよ」

花子が小さく啼いた。

「ここでは、いつも雨が降っているんですよ。毎日」

急に動物臭がきつくなつた気がした。

「用事を忘れるところだった」僕は小さく笑った。Kも愛想笑いを浮かべた。僕は教務に内線電話をかけた。

「すぐに行きます」

と、男の声が返ってきた。そして、動物舎を出た。

3 プラナリア

ロッカー室の前で、教務のTが待っていた。

「いや、ご足労をかけます。帰ってこられる木村先生のロッカーがなくて。でも、鈴木先生の私物を勝手に処分するわけにもいかないし。どうぞ」

Tはドアを開けて僕を促した。

「奥さんはいないの」と僕は訊いた。

「いますけどね。こちらに任すって」

「そう」

「忙しいですって。3人も子供がいて」

Tは皮肉を込めてそう言った後、急に笑い出した。

「だけど笑っちゃったなあ。鈴木先生が失踪して四日目ぐらいかなあ。奥さんが給料取りに来たんですよ。子供二人の手をひいて、乳飲み子を背負ってましてね。まるで終戦直後の買い出しみたいだった。奥さんが帰ってから、みんな爆笑」

「終戦直後の買い出し……。そんなの知っている人がいるの」

「誰もいないすね。でも、テレビなんかでよくやってるでしょ」

「まあ、人の不幸ほど面白いものはないからね」

「俺たち教務課の仕事は刺激がないから」

と、Tは自嘲的に言った。

「俺、鈴木さんってあんまり知らないんだ。話した記憶もない」

と、僕は言う。

「大人しい先生ですよ。あまり目立たなかったなあ。おなりなんて

渾名があつて」

おなり……。少し親近感がわく。

Tがロツカーを開ける。

「何にもないなあ」

Tの言葉通り、ロツカーの中はがらんとしていた。紙袋が、一つ、隅に立てかけてあつただけ。Tが紙袋を取り出す。

「これだけか。ノート一冊と写真が入ってる」

Tが首をひねった。

「何ですかねえ、これ」

虫のようだが、僕にも分からない。

「プラナリア」

「プラナリア？」

「ほら、ノートによく似たスケッチがありますよ」

Tがノートを指さした。

「プラナリアの再生能力と薬物の影響、鈴木昭彦。鈴木昭彦……」

僕は白衣のポケットを探る。

「彼からの手紙か」

封を切り、読んだ後、封筒の差し代人が読めるようにして、Tに

渡した。

「いいんですか、俺が見ても」

僕は頷く。

至急に、来島、願う。事態は切迫している。頼む人は君しかない。

「至急に、来島、願う。事態は切迫している。頼む人は君しかない。何が切迫してるんですか」

不意打ちを食らった気分だった。

「妙な手紙だね。何かの間違いだろう。鈴木さんとは挨拶する程度だったから」

「奥さんに知らせましょうか」

「頼むよ」

僕は、手紙をTに渡した。Tは戸惑った表情になった。

「俺は要らない。当然四国にも行かない。俺には関係ないよ」

僕は、彼の事を考えた。過去に何かのつながりがあつたのかも知れない。だけど、何も思い当たらない。同じ大学にいながら、不思議なほど接触がなかった。

「彼、失踪してからどれくらい経つのか？」

「どれくらいかなあ。確か暑かったですよ。蝉が急に啼きだした頃だから」

ふーんと相槌を打って、それは去年の事か、今年の事かと聞こうと思つたがやめた。

二百人の学生が腰掛けている階段教室での、授業が始まる。教授は二十年間同じノートで淡々と授業を進めている。次に何を言うのか、分かる。受けねらいの冗談も同じだ。

半分以上の学生は眠っている。だから、とても静かだ。僕は、通路側に置かれた学生証と出席簿を照合していく。時々違う学生が眠っている、その学生証を指で弾く。出席を取り終わったら学生は、さつさと後ろの扉から消える。お構いなしに授業は淡々と続く。一仕事終わった僕は、一番後ろの窓際に腰掛け、やがて眠りに落ちていく。学生は次々にかわっている筈だが、僕には同じ群れに見える。群れは次々に流れていく。それに紛れている僕は、流れに流されない小さな黒い石だ。

実習も全てが僕が用意する。後始末もそうだ。

使用する試験管、ピーカー、薬品まで実験台の上にセットする。他人任せの贅沢な釣りを大名釣りと言うが、これは正しく大名実験だ。コース料理みたいに高い授業料には準備の時間や後片づけの時間は含まれていない。

学生がふざけて、掌でエーテルを燃やす。それを感心してみている奴がいる。

「熱くないかい」

「ふざけるなよお前ら。エーテルを燃やしてる奴も馬鹿だが、それを見て驚いてる奴も馬鹿だなあ」

僕が言う。

「エーテルの化学式は $C_2H_5OC_2H_5$ 。沸点三十四・四八度」

女学生が歌うように説明した。僕は手を叩く。

「正解」

「そんな調子で奥さんを口説いたんですか」

燃える掌を擦り合わせながら言った学生の頭を思い切り張った。

確かに、五年前、直子も実習学生の中の一人だった。

雨の中、学生とラグビーをする。激しくぶつかり合う。トライする。仰向けで見上げる僕の目に取り壊される旧館が聳えている。ドロドロのユニホームを脱いでシャワーを浴びる。

「予選通過」

キャップが僕に声をかける。

「今度はいけるぜ」

僕がこたえる。

「オッス」

拳固を合わせる。試合に出る資格はないが、時々、選手に混じって出ている。これ以下はない最下位のリーグだから、誰も文句をつけない。

こうして、僕の一日の仕事は終わる。後はプライベートな時間になる。仕事場と家庭の間に少しの隙間が出来る。

金曜日の夜は、電車を一本遅らせて、駅前の立ち飲み屋でビールを少しだけ飲んで家に帰る。週末のささやかな楽しみだ。

4 帰路

駅の裏出口、狭い道路に面して立ち飲み屋がある。何時も肩が触れあうほど込んでいる。時には入れない事もある。その時は外で2、3分待つ。必ず空く。

今日も、狭いカウンターに、サラリーマンがひしめいている。煙草の煙、おでんの湯気が混じり合っている。知らない人の間に僕が割り込む。客が電車に乗り遅れるのを防ぐためだろうか、この店の時計は何時も五分進んでいる。高架を電車が通る。もうすぐに自分の乗る電車がやってくる。

「生ビールの中」

「あては？」

「ねぎま」

「何本？」

「一本」

「生ビールの中、ねぎま一本」

定型の会話。先週も、先々週も、一月前も、一年前も。

ただ、今夜は店に異質なものがいた。

女だ。

それも美しい女だ。

年は二十歳を少し超えたところだろうか。淡いグリーンのツーピースを魅力的に着こなしている。化粧気は殆どない。口紅も引いていない。化粧は何もしていないのかも知れない。肌が生まれつき美しいのだ。透き通るように。

煙草とおでんの湯気で霞む店内。対面のカウンターに女はいる。だが、彼女を奇異な目で見るものは誰もいない。客たちは女などいないように談笑したり、黙って酒を飲んだりしている。僕だけが女を見つめている。一瞬、幻覚かと思った。

女は日本酒を水のように、ツーと飲んだ。目はまっすぐに僕の方を見ている。また、日本酒を水のように、ツーと飲んだ。男ばかりの客の中で、意外なほど違和感もなく溶けこんでいる。僕も生ビールを飲み干した。所詮関係ないと思った。変わった女がいるだけだ。

と。

「勘定」

「五百三十円。おつかれさん」

僕は五百円銀貨を一枚と十円銅貨を三枚、カウンターに音を立てて置くと同時に、飲み屋に背を向けた。

雑踏にもまれながら駅のホームを歩く頃は女の事は忘れていた。

よくもまあ、こんなに沢山の人間がいることかと思う。蟻のように集まっている。そこにいる僕をどう考えればいいのだろう。確かに僕はたった一つの世界だと思う。僕は僕以外の人間になれない。無数の他人も僕になれない。僕は僕でしかない。他人は他人でしかない。僕を含めて、頭の数だけ世界がある。

自分の影を踏むように歩く。影は人工の明かりの中でバラバラになっっている。様々人間と重なる。僕は僕でなくてもいいのかも知れない。Kの言うように、彼の夢であつたとしても……。神経を元に戻す。弥次郎兵衛のように。僕は現実的な事を考える。

明後日の運動会のこと、これは楽しみだ。一週間後に迫つたらグビーの地区予選の事、いかに作戦を立てるか。

次の電車の時間を確認し、空いている車両に、いかにして楽な位置を確保するか。一時間以上の長丁場だから。但し無理をしてはいけない。他人の怒りを買う危険が絶えずある。他人の中にある怒りが何の前触れもなく僕を襲う。一月ほど前は胸倉を捕まれた。

「汚い乗り方をするなよな」

誰かが、僕の横にすーと肩を並べた。背が高い、長い髪の女。飲み屋で見た女だつた。僕に会釈をする。反射的に会釈を返した。

「雨が止みましたね」

誰にとも言うのではなく女は呟いた。そして、僕を見た。

「ええ」

僕は足を止めなかつた。女がついてくる。

「さつき一緒でしたね」

女は話しかけた。澄んだ声だ。

「ええ」

肩を並べてホームを歩く。立ち止まり電車待つ列に並ぶ。

「金曜日の帰りに立ち飲み屋で一杯。週一度の贅沢ですよ。月一万円の小遣いですから」

僕は、自嘲的に笑う。女が小さく頷く。雑踏の中で、僕の言葉が消えたのかも知れない。

「手紙は届きましたか？」

突然女ははつきりとした口調で言った。

「えっ」

思わず聞き返す。

「手紙は届きましたか？」

女は僕の目を覗き込むようにしてもう一度言った。濡れているような黒い瞳だ。

「手紙？」

「手紙です」

「君、誰？鈴木さんの奥さん？」

電車が入ってくる。女は、首を振る。電車の扉が開く。僕は女と一緒に車内になだれこんだ。

やっと、つり革を握った。横に女がいる。つり革を女に譲ろうとすると女は微笑んで、断った。電車が動き始める。

「同じ方向ですか？」

女は僕の言葉を無視して、美しい声でこう言った。

「月島は瀬戸内海の島です。周囲約十八・二キロ、塩飽諸島の中で一番大きい島です。人口は五百人足らず。過疎の島です。八浦は」

「僕は行きませんよ。明後日は子どもの運動会、来週はラグビーの地区予選。結構忙しいですよ」

僕は彼女の言葉を遮った。

「事態は切迫しています。鈴木さんは監禁されているのです」

「監禁？監禁されている彼が僕に手紙をくれたんですか？僕なんかより警察へ送ればいい」

「救えるのはあなただけです」

怪訝そうな顔で、客が二人を見るが、直ぐに目をそらす。通勤電車の中での会話としては、すごく特殊だと思う。僕は内緒話をするように声を潜める。

「行きません。どうして四国くんだりの島まで行かなくちゃならないですか」

女は、ふっと、僕から目を逸らした。電車はゆっくりと高架を上がり始めていた。

「いいえ、あなたは来ます。私が来たから」と、歌うように言った。僕も女から目を逸らした。様々な都会の明かりが車窓を流れて行く。

奇妙な言い方だが、女はすーと立っていた。電車の揺れに体が反応していない。まるで、立体的な映像のように。

「私は今、海を見えています」

「海。ネオンの海ですか」

笑いながら僕は言った。

「私は今、浜辺にいます。波が打ち寄せています。水島の火が見える。岡山県倉敷市水島。コンピナートの火です」

僕は女の顔を見た。狂ってるのだ。鳥肌が立った。二人は黙っ

た。沈黙は深い。窓の外はネオンの海だ。突然、車窓に映る女の姿が、浜辺に蹲る女になった。車窓の闇が、海になった。女が見ているコンピナートの火が、ピルの向こうに見えた。はつとして振り返ると、女の姿が消えていた。ぎっしりと人で詰まった車内。女を捜すが何処にもいない。車窓には、つり革にぶら下がった自分の姿しかない。消えた。一瞬の夢を見たのか。

5 家庭

土曜日には車を洗う。気が向けばワックスをかける。昨日から一転して今日は朝からよく晴れた。明日の運動会は多分大丈夫だ。

土曜日の夜は歩と風呂にはいる。体を隅々まで洗ってやる。

「運動会、がんばれよ」

「あゆみ、沢山出るんよ。お遊戯でしょ、玉転がしでしょ」

一つ一つ、考えながら指を折る。可愛いしぐさに思わず抱きしめなくなる。

「家族しているなあ」

と呟いた。

「そうか、そうか」

「玉入れも」

「パパも出るぞ」

「パパは二人三脚だよ」

歩の頭を洗う。湯船につかる。歩が数を数える。

「あんまり長いと、湯あたりするよ」

外から直子の朗らかな声がする。

僕と歩の笑い声が、風呂場に響いた。

休みの日は直子も夕食の前に風呂に入る。その間に書齋でコンピュータの電源を入れる。本なんか読まないけど、一応書齋と言っている。使っていない部屋もあるんだから。

広告以外のメールなし。ウイルスメールが3通、プロバイザーのウイルスチェックに引っかかっている。

ラグビー部の掲示板を覗く。連絡事項はないようだ。ついでにチャットにはいる。誰かいる。ラグビー部員ではない。

「誰？」

見覚えのあるドアが映る。ノブをクリックする。突然画面にKの姿が出た。Kは花子を膝の上に抱いている。下半身は闇の中にある。

「やあ」と、Kは僕に向かって手を上げた。僕も軽く手を上げる。

僕の方の映像も開いた。画面の左上の隅にKの部屋を置き、僕の部

屋は右下隅に置いた。

「どうして入ったの？」

「先生のパスワードで入った」

「教えたかなあ」

「IDがRugbyでパスワードが家の電話番号、一発目で入れたよ」

「ずばらだから」

「まあね。何か用」

「別に」

会話は止まった。それを破ったのは僕の方だった。

「女が消えた」と言った。昨夜の出来事をかいつまんで話した。

「不思議じゃない」

Kは腰を小刻みに動かしながら言った。花子の目に涙が溜まっている。

「時間は一つだけじゃない。それぞれがカプセルのようになって、一人一人が一つずつのカプセルの中にいる。女は君のカプセルに来たんだ。僕のカプセルにもいるんな時間がやってくる。侍も来る。乞食も来る。三葉虫だってくるんだから」

Kが言った。

「分からない」と僕が言う。

「分からない……」

Kは不思議そうに首を傾げた。

「現に君はここにいるじゃないか」

Kは、又、不思議そうに首を傾げた。

「コンピューターの世界だよ」

「同じじゃん」

Kは笑った。

「俺が島へ行つて、彼を救い出す。そんなアクション映画みたいなこと俺には出来ない」

「多分、違うと思う」

Kは言葉を区切った。

「君はキーなんだ。君が行くことで、どこかの扉が開く。カプセルが開く。時間が開く。何かが再生し、何かが死ぬ」

「プラナリアみたいにか」

反射的に言葉が出た。何故だろう。

「プラナリア？」

Kが聞き返した。

「ごはんよ」という妻の声が聞こえた。歩が走ってくる音がした。

「じゃ」

と、僕は自分の部屋を閉めた。Kも花子の手を掴んで無理矢理バ

イバイをさせた。一瞬にして彼の部屋も消えて、僕たち三人の家族の壁紙が画面一杯に広がった。みんな笑っている。

「鈴木先生？覚えていないわ」

「薬理の助手だから、会っていると思う」

「僕は慌ててこたえる。」

「確かにそうね」

突然入り込んできた動物舎の感触がまだ立ち去らない。

「歩、もう寝なさい。明日は早いから」

「はあーい」と返事をして、ズズちゃんの枕を抱えて、歩は寝室へ行った。

「それじゃ俺も」と、僕は立ち上がる。

「ビールが残っているよ」

「もういい」

「それじゃ私がもらおうと」

直子がひょうきんに言った。

6 運動会

去年は六時に家を出た。見やすい場所は全て埋まっていた、背伸びしても殆ど見えなかった。だから、今年は四時半に家を出た。星が一杯出ている。幼稚園最後の運動会なんだから。学校への道は横が川だ。川に沿ってぼんやりと街灯が道を照らしている。夕暮れに灯り朝になると消えるセンサー付きの蛍光灯だ。

校門は道より低くなっている。夜目にも沢山の親が並んでいる。

大半が男親だ。ガードマンに番号札をもらった。パチンコ屋の開店みたいだ。

「1番は0時だって」白髪交じりの男が話しかけてきた。ずいぶん年がいつてからの子供なのか、それとも孫か。

「負けるよなあ。あんた何番？」男が続ける。

「あんたの後ろだから」と僕は答える。

「ごめん、当たり前のこと聞いて」

「60番か」去年よりマシか。携帯電話でメールを送る。

「60番」直ぐに返事が返ってくる。

「入場門の辺りがいいよ。昨日下見をしたから」

「了解。頑張るよ」

「いい場所はダメだなあ」

さっきの男が言った。

くすんだジャンパーを来た男が前から僕に近づいてきて耳もとで囁いた。

「20番と代えてもいいですよ」

「いや、いいです」慌てて答える。

「ダフ屋か、ちえっ、俺には聞かなかつた」59番が吐き捨てる。後ろの方で

「いくら？」という小さな声が聞こえる。僕は、ふっとため息をついた。

ガードマンが三人、門にやってくる。

「今年は警備会社に頼んだんですよ。けが人が出ても、学校は知りましえーん」

59番が言った。

列に緊張感が走る。

「そろそろ開きますよ」

ガードマンが携帯マイクで叫ぶ。

「20番まで」

もう一人のガードマンが列を分ける。

「ここまでね」

門が開く。一斉に駆け出す男親。1番が転けた。一斉に笑い声が起こる。

「転けたよ1番」

59番が嬉しそうに言った。

一番が素早く起きあがる。飛び散った眼鏡をかける。1番が泣いている。そして、叫んだ。

「幸子ごめんな！」

不思議なもので、いつの間にか三、四人の仲間が出来ていた。僕は、結構上手に人と合わせる事が出来る。まだ夜が明けきっていない。グラウンドに男親が四、五人、ビデオカメラを持って集まっている。知らないもの同士だから、仮にA、B、Cと呼ぶ。

「このあたりがゴールですからね」とA。

「ゴールの瞬間がなんといっても一番ですよ」とB。

「一番大事なのは家族ですよ。他人まみれの会社から帰って、そう思いませんか？」詠嘆調に言うのはC。

「そうだよ」と、どうでもいいのに、合わせるのが僕。

「ちよつと、誰かゴールに立ってくれませんか」とA。

「まだ、暗いよ」とB。

「いいの、いいの、試写だから」とA。仕方ないなあという感じで、ゴールの方に向かうB。

「私のも取って貰おうかな」と、Cが僕の顔を見る。

「備えあれば憂いなし」理屈っぽいなあこいつと思いつつながら、笑顔で浮かべて、「いいすよ」と僕はCのビデオカメラを構える。Cが

ゴールを駆け抜けたり、カメラに向かってピースなんかと色々やっている。馬鹿らしいので時々、画面から外してやる。その時、運動場の端から、こちらに近づいてくる人影がフレームに入ってきた。奇妙な格好をしている。背が低く、太っている。タンク・タンクローのような女だ。両手に子供の手を引いて、乳飲み子を背中に負ぶっている。終戦直後のという比喻が、あながち的はずれじゃないと思つた。

「日向さんですね」

真つ直ぐに僕に向かってやって来て、女は言った。

「そうです」

「奥さんにこつちだつて聞いたから。鈴木です」

「鈴木さんの……」

「ええ」

「俺だつてよく分かりましたね」

「私、こんなのはよく分かるんですよ」

背中の子どもがむずがる。

「始発で来たもんで。これ」

子供をあやししながら、女は封筒を目の前に差し出した。思わず受け取ってしまう。

「八浦までの道順と切符が入ってます。明日、出勤の時間で間に合います」

「八浦？なぜ僕なんですか。あなたが行けばいい」

「子どもを三人連れてですか」

「それはあなたの問題だ。僕は関係ない」

横にやってきたCにカメラを渡すと、僕は封筒を女の前に差し出した。女は僕を真つ直ぐに見つめる。狂信的な目だと思つた。

「あなたと鈴木は双子です」

封筒を受け取りながら女は言った。

「いい加減にして下さい。僕には兄弟はいない。一人っ子ですよ」

「いいえ双子です。あなたは知らないだけです」

そして、投げやりな口調で

「そっくり」

と、うそぶいた。

「似てなんかいないよ。鈴木さんの顔は知っているんだから」

僕はぞんざいに言った。

「主人は死ぬかもしれない」

女は歌うように言った。僕は女が美しい声の持ち主であることに気づいた。

「止めて下さいよ」

二人のやりとりビデオカメラを向けているCに僕は言った。

「ゴメンゴメン直ぐに消すから」

「Cは頭をかきながら、僕から離れて行った。」

「これだけ頼んでダメならいいですよ。これも運命だから」
女は背中の子供をあやししながら言った。

「これ、やっぱり預けます」

女が封筒を差し出した。

「困りますよ、絶対に行かないんだから」

「それでもいいです。気が変わるって事もありませんから」

僕が封筒を受け取ると、女はぺこりと頭を下げた。自分の役目が終わったという風に安堵の表情を浮かべた。背中の子供が僕を見て笑った。僕はバイバイをする。女は少し歩いて、急に振り返った。また、僕の方に歩み寄って来る。

「このノート、薬理学の教授に見せたら、笑いながら要らないって。マンガだと言われました」

「マンガ……」

「預かってくれますか、マンガでも、あたしにはちんぷんかんぷん」

女が、照れたように笑った。女の意外に美しい笑顔に、僕は、黙ってノートを受け取る。僕にノートを渡すと、女は、一度も振り返らずに、ドンドン行ってしまった。

人の気配に振り返ると、直子がいた。

「厄介なこと？」

「いいや。何か間違ってるんだよ」

僕は答えた。

子供達が登校してくる。

「おっ、主役たちが来たぞ」

Bがはしゃいだ声を出した。周りの雰囲気も一気に高揚する。

「直樹、父さん来てるぞ」

手を振る奴。

「亜衣香、がんばれよ。父さん応援するから」

大声を上げる奴。下を向いたのが多分亜衣香ちゃんだ。

直子と僕は、ビーチシートに腰を下ろす。

「去年よりずーと前ね」

「0番だよ」

「ふーん。0番か」

並んで運動場を見つめる。もうすぐ最初の駆けっこが始まる。

「子供って可愛いよね」

僕が言う。

「私は？」

直子がいたずらっぽく聞く。

「もちろん」

「そろそろ、走るよ歩」

「俺、家族のために一生懸命生きてるよね」

自分にも意外な言葉が出た。

「うん」

直子が頷いた。

「しっかり、お父さんをしてる」

子供が走り出すと、我先にいい場所を求めて、ビデオカメラを構えて親たちが走り出す。僕もダツシユ。ラグビー部員だ。

「どけよ」

「ずるい」

「反則よ」

「あんたを撮っているんじゃないよ」などの怒声が飛び交う。

「突然双子なんて言われてもね。双子の兄弟か。歳の違う双子か。あの人、先輩だよ、最低2つは、浪人してればもっと」

ビールを飲みながら、僕は言った。

「歳の違う双子。面白いわね」

「説明できない事って面白いね。歩、もう寝た」

「くたたくたよ。お父さんにいいところみせたいって、頑張ったから」

「ああ、3着はできすぎだ」

僕は、ビールのジョッキを黙って、じっと眺める。細かい気泡が上がっていく。

「どうかしたの？」

じつと気泡を見つめている僕に直子が声をかけた。

「まず、手紙が来た日に、鈴木さんのロッカーを開けた」

「偶然よ」

「満員電車から女が消えた」

「車両を移ったのよ、それとも、大きい人の背中に隠れた」

「鈴木さんの奥さんが来た」

「あの人、少しおかしいわ」

その時、電話のベルが鳴った。直子が慌てて受話器を取る。「切れた」

受話器を耳にあてたまま、直子が言った。電話は、もう一回鳴った。電線の向こうに多分鈴木さんの奥さんがいるのだろう。

他人はどんな夢を見るのだろうか。夢の内容ではなくて、見方。現

実の体験のように見るのだろうか。それとも、想像の姿に似たものなのだろうか。

「夢は無意識の窓」だとフロイトは言った。それは学生時代の刷り込みだ。一年生の時に一般教養科目というのがあった。心理学、哲学、英語、ドイツ語、数学等々。心理学の講師はギョロ目の禿頭だった。彼が「夢は無意識の窓」だと繰り返し言っていた。眠っていても、覚えるほどに。男子学生がカードに書かれた言葉を読んで女子学生が即時に答える心理テストのようなものをやらされた。ともかく薬学生は人がよいというか育ちがいいというか……。男女が二列に並んで文句も言わずに実験台になっていた。裏返しに用紙が配られ、自分の番が来るまで読むのが禁止された。前列から順番に用紙に書かれた言葉を男子学生が読み上げる。僕の隣は秀才で美人、いつも最前列で講義を聴いているNさん。通称ネコ。

空とか山とか夢とかが続いて、僕の番になった。僕は「ペニス」と言った。秀才の女子学生が「やりたい」と答えた。彼女の名誉のために、「テニス」と聞き違えたのだ。禿頭の講師が顔を真っ赤にして笑った。たった一人で笑っていた。次がホーデン。女子学生が「何、それ」と答えた。そのあたりから段々講師の企みが分かってきた。後は男子全員が「パス」と言った。女子学生の答えは、「おながすいた」、「ああ」、「助けて」、「お嫁に行きたい」、「ベンゼン」、「ランゲルハンス島」、「好き」、どさくさに紛れて愛の告白等々。

インターネットで調査してきた学生の報告。講師は四十六才で、マザコン。出向元の大学はとくに首になっていた。原因は男子トイレの盗撮。

「盗撮なんかせずに自分のを見れば」と教授に言われて、彼は黙って教授の股間を掴んだ。にやりと笑って。これは噂。

英語の助教授にもたまげた。テキストはシエイクスピアの「ジュリアス・シーザー」。出席簿順にキツチリと並ばされて講義が始まる。「起立」「礼」はさすがにないが、中学生なみだ。ベンゼンを学びに来た学生にシエイクスピアとは……。テストは難しく、助教授は点数を×10とした。すなわち36点で合格。だが2人を除いて全滅だった。もう一人の英語教授はD・H・ロレンスの「息子と恋人」、要約だが、を淡々と訳した。ブンガクに興味なしの僕が、英語っていいなあと一瞬思った。中身ではなくて、リズムかなあ。二つの講義は受験英語と全く違っていた。ぼんやりと分かる。

話を「夢」に戻そう。

「夢」は確かに無意識の窓である。夢と現実（体験）は深いところで繋がっていると思う。

僕は時々シリリアスな夢を見る。目覚めても、現実との境目が明確

ではない。時々、こんなことはなかったねと、直子に確認することもある。

夢の中で、僕は透明人間だ。現実では、僕は、自分の手足などの体を見ることが出来るのだが、夢の中では、僕の体は消えている。意識が浮遊している。だからそれが夢なのだと分かるはずだが、そうはいかない。現実でも、自分の体を意識しないことは度々あるからだ。夢は網膜のスクリーンに映しだされるもう一つの現実だろう。他人の顔ははつきりしている。色も所々に付いている。

僕は久し振りに金縛りになった。その夜の夢は今まで体験した事のないものだった。現実と全く関係のないものが突然差し込まれたような。他人の夢みたいだ。

体が浮遊して、天井に上がり、窓から飛び出した。起きようともかくが、体が動かない。窓から飛び出した僕は誰かを追っている。幼い僕だ。そう意識する。相手に明確な顔はない。幼い僕は、奇妙な門構えのある家を通り抜ける。闇の中を走る。石の鳥居があり、その向こうに小さな社がある。過去に経験のない場所だ。視覚ではない。意識が風景を作る。網膜の薄い闇が風景を作る。社の戸を幼い僕が引く。天井に龍がいた。薄い闇の中に、龍の眼がある。そう感じる。金縛りが解けた。僕は布団の中にいる。

又、引き戻されそうなので体を伸ばす。

「どうしたの？」

直子が言った。僕は直子の体を抱いた。直子は僕に応えた。何故かすごく悲しかった。直子を愛していると僕は思った。でも、その感情は正確ではない。愛すると言うより、直子を痛ましいと思った。どうして、僕の側にいるのか。どうして僕に抱かれるのか。その時、電話が鳴った。電話が二度鳴って、切れた時、僕は射精した。

直子が半身を起こして、ぼんやりと天井を見ていた。

「どうしたの？」

今度は僕が聞いた。

「誰かが見ている」

「見ている？誰が？」

「たくさんいる。車座になって私たちを見下ろしている。海の音が聞こえる」

「海の音が…」

「海は…」

「気づかないだけで何時も誰かに見られているのかもしれない」

ふと漏らして。

「いや」

と、直子は小さく叫んだ。僕は、直子のことは何も知らない。電話の向こうに誰がいるのかを本当は知らないように。

直子が眠り落ちたのを確認して、僕は静かに寢床を抜け出した。

居間のテーブルの前に腰掛け、僕は鈴木さんのノートを開ける。一頁目にプラナリアが描かれている。

薬物と再生速度。いくつもの薬物が描かれている。フェノバルビタール、ヒダントイン、アスピリン…。医薬品ばかりだ。再生促進、抑制、阻止。細かい字がびっしりと並ぶ。

再生は形態的なものに限らず、動き、性格、思考まで含む。教授がマンガだといった意味が分かる。プラナリアに性格と思考…。ノートの最後に、マジックの太字でこう書いてある。

プラナリアのように人も再生する。

気がつくのと、直子がいつの間にか、僕の前に腰掛けていた。

「ノートには何て書いてあったの？」

「専門的なところは省略するね」

「うん」

「結論として、プラナリアのように人も再生する。それは、過去かもしれない。また、未来かもしれない。だが、そのためには先祖を殺さなければならぬ」

「何それ。プラナリア、先祖？」

「何のことが分からない。只、俺には海の記憶がある」

「海？」

「親父の田舎にも、俺が育った所も、海はない。だが、俺の記憶の中には海がある。小さな島。少し歩くと、海だ」

僕はさつき見た夢の続きを語っている。

「少し飲む？」

直子は、僕が飲まずに置いている、とっておきのサントリー

「響」の封をいとも簡単に開けてしまった。僕は時計に目をやる。

午前2時を少し過ぎている。丑三つ時。水割りを飲む。思わず「うまい」と唸る。直子は水を飲むようにスーと半分ほど飲んだ。

「それに俺達は双子かもしれない」

直子が笑った。

「同じ大学にお互いに知らない双子がいた」

「歳の違う双子。兄は、生まれる一年前に、出生届けを出す。俺は

一年遅れ。2つの歳の差が出来る」

「そんな」

「島では可能だよ」

「一年遅れて出生届を出すのは可能かもしれないけど、一年前は不

可能よ」

「一才で早世した子供にかぶせたんだ」

「どうしたの、オサム」

「大丈夫。久しぶりだね、お父さんじゃなくて、名前を呼んだのは」

直子は黙って、残りの水割りを飲んだ。そして、音を立てずにコップをテーブルの上に置いた。

「怖いなあ」

直子は僕に言うのでもなくそう呟いた。

僕は自分でウイスキーを入れた。

それから、僕は2時間ほど眠ったらしい。また、他人の夢を見た。

網膜の薄い闇の中にグランドピアノがあった。その横に、地味なスーツを着た平凡な顔立ちの女学生がいた。彼女は、鍵盤蓋を開け、ナイフでピアノにこう刻んだ。

「革命」

女は、思い切り両手で鍵盤を叩いた。

「誰？」

女は僕の意識の方を見て言った。

「君こそ誰だ？ここは僕の時間だよ」

「何を言ってるの君は？」

女は僕の意識の方を真っ直ぐに見て言った。

二章 閉じられた無限

1 雑踏

朝の通勤。僕はいつもの時間に、いつものように雑踏の中にいる。

理由もなく、週に二・三回、朝の通勤が一緒の男の事を考えていた。この何週間は合わないなあ。どこの誰だか知らないし、勿論話した事もない。彼は私鉄への乗り換え口のキオスクで耐ハイを一本とハイライトを一箱買う。そして、駅の隅で耐ハイを飲む。後は他人に紛れてしまう。

何らかの理由で彼は僕の世界の小さな一部から消えた。多分二度と合わない。

私鉄への乗り換え口に続く巨大な階段。様々な足がコンクリートの階段を上がっていく。足音が響く。コンクリートの階段を上がっていく様々な背中。無数の虫を連想する。規則正しく足音を刻む。僕も無表情に階段を上がって行く。そして、階段の途中で、川の流

れに逆らう棒杭のように僕の足が止まる。振り返ると、顔のない顔が僕を次々に追い抜いていく。僕は新幹線の乗り換え口に向かって階段を一気に下った。

八時五十分 のぞみ九号 東京発。僕は時速二百kmの空間に身をゆだねる。軽く目を閉じ、時速二百kmで飛ぶ。僕は、超高速な鳥になる。

時間が軋む。空間が歪む。

平日だから、乗客はサラリーマンが殆どだ。SF映画マトリックスのスムースのように増殖している。背広、ネクタイ、鞆。みんな一様に眠っている。

大学への連絡、直子への電話、やるべきことをする気がしない。何も。只、飛んでいく景色を眺めている。窓の外の風景に人の姿はない。家、ビル、道路。山が現れ、トンネルの壁が流れる。鉄塔、空に突き出したクレーン。一瞬現れ、消える。窓の外はシーンとしている。無音の世界。そこに無数の人が溶けているのだろう。自分の影が一瞬の風景をよぎる。反対かも知れない。自分の影に一瞬の光景がよぎる。さて、さて、僕は何処へ行くこうとしているのだろう。

あまり自分の過去を振り返るたちではないが、今まで生きてきた三十三年間を送り景色に重なる。時速二百kmで過ぎていく。何も覚えていないなあと思いつながら、ガムを噛む。賞罰なし。学級委員の経験なし。優等生の経験なし。いじめたこともいじめられたこともなし。女性に言い寄られたこともなし。いや、少しはある。言い寄ったことは数限りなく。思想もなし。そう、今思い出したが、学級委員は一度なった。衛生係。爪を見せなさい。ハンカチ、鼻紙。衛生に一番問題のある僕がやっていた。

それと、学芸会で、一度だけ劇に出た。僕の科白はたった一つ、「あつ、ヘリコプターだ」。それでも、家族、親戚、揃って観に来た。

科白の後、弁当を食べるシーンになる。鯉節と、梅干しの弁当は、蓋を開けると、鯉節が全部蓋の方に張り付いた。僕は、蓋で弁当の中身を隠して食べた。

母は激怒した。たった一つの科白と、自分の作った弁当を隠し食いされたことについて。

「そんなに恥ずかしいお弁当をママは作ったの。あんたの左の子なんて、卵焼きを箸で突き刺して、お母さんに見せていたよ」

「卵焼きなんてないもん」

「梅干しがあつたでしょ」

「次はそうするね。みんな笑うよ」

ママの平手が飛んだ。そうして、女の常で、少し泣いた。平々凡々だよなあ。窓の外の僕に話しかける。それで幸せだった。窓の外の僕が、僕に言う。幸せ…と返すと、窓の外の僕は対向する200kmにかき消された。

時刻表通りに、十二時十四分に、のぞみ九号は岡山のホームに滑り込んだ。僕の電波時計が正確な時間を示していた。岡山は初めての土地だ。

瀬戸大橋線へのコンコースを歩く。鈴木さんの奥さんが僕に渡した切符通りにやって来た。次は、十三：二十二発L特急しおかぜ十三号。「祭り寿司」か「ままかり弁当」で迷いに迷ったあげく、ままかり弁当と缶ビール、週刊誌を買う。旅だ。旅だと思えば。直子に電話をする。

「本当に行ったの」

呆れた声が返ってきた。

「ちよつとした旅行だと思えばね」

「いいなあ、一人旅か」

「交通費持ちだから」

「そうね」

「大学からは？」

「何も」

「俺なんかいなくても、どつて事ないか。明日帰るよ」

「大学への連絡は？」

「僕からする」

「マスカットが食べたいなあ」

「分かった」

電話を切る瞬間、直子が思い出したように慌てて言った。

「気をつけて」

すぐに直子から電話が掛かった。

「変な事にならないね」

「変な事？」

「だって、その人を」

「大丈夫。その家を訪ねるだけ。探偵の真似はやらないよ」

「そうね、旅行だから」

「帰ったら、三人で何処かへ旅行に行こう」

「温泉がいい」

「そうだね」

マスカットを一房宅配便で送った。

「ままかり弁当」を食べ終わり、缶ビールのプルリングを引いた時、列車は瀬戸大橋を渡り始めた。海を渡る。眼下は海。広がる

海。漁船が浮かぶ。波立つ海面。海の上を渡る。大きな嘘の中にいるような気がする。世界に繋がる海。深い、深い、海という名の宇宙。

「huge」

僕は訳もなく何度も繰り返した。

JR丸亀駅に着く。小綺麗な駅だ。改札口を抜けると、小柄な老人がさかんに鎌を振っていた。触れただけで血が飛びそうな鎌だ。シャ、シャと振り回して、後ろ腰に差す。僕は反射的に男から距離を取った。シャ、シャと振り回して、又、後ろの腰に差す。小さな狂気が、臨界点に達すると、全ての日常が切り裂かれる。女子高校生が笑いながら、男の側を通り抜けた。男は又、光る鎌をシャ、シャと振り回した。正常と異常が交錯している奇妙な光景だった。

コンビニで下着を一揃、買った。

噴水のベンチで鈴木さんの奥さんが描いた船着き場への略図を広げる。驚くほど詳細に、丁寧に描いてある。「もし午後3時の幸丸に間に合わなかったら、午後6時にフェリーが一本だけあります」。文字も美しい。これで封筒の中は空になった。帰りは自前か。僕は自嘲した。

小綺麗な公園の近くにある船着き場は直ぐに分かった。幸丸は接岸していて、初老の夫婦らしい二人が、荷物を積み込んでいた。

「八浦行き」を確認すると、潮焼けした船長は「江浦まで行くけど、そこからは自分で行ってな」とぶっきらぼうに言った。

とにかく行き先は通じたのだ。

船内に入ると、七、八人の客がすでに乗っていた。僕が乗り込むと、会話を止めて急に押し黙った。

船が動き始めると、船長の妻らしい女が、船賃を集め始めた。車掌靴を首から提げている。潮焼けした顔に健康そうな白い歯が目立った。

客に行き先を聞かない。五百円だの六百円だのを集める。客たちの会話も始まる。船の音がやかましいので、声は大きくなる。

「何処まで行ってきたな」

「高松までや」

「高松、長いこと行かんや」

「子供ができたけ」

「新ちゃんけ」

「新二は大阪や」

船長の妻らしい女が僕のところに来てきた時、乗客たちの会話は途切れた。見たことのない男の行き先に興味が集まった。

「八浦まで」

「ほな、江浦までや。五百円。八浦はよらんけ」

「バスでもあるんですか？」

「島にバスなんかないけ」

乗客たちは大笑いする。

「歩きか、白タクじゃ。白タクは松本で頼んだらええ」

長身の老人が言った。

「松本」

「民宿じゃけん」

老人答えた。

「八浦の何処へ行くけ？」

背後から声がした。振り返ると、小柄な老人が目を逸らした。

「鈴木さんです」

「長け」

長身の老人が言った。

「おさ？」

「島じゃ、名前より屋号で呼ぶけ。濱屋、新屋、新莊」

「わしも、八浦の稲田から来たけん。なんもない所や」

船室の隅に縮こまっていた老婆が言った。

船室から外に出た。海の風が気持ちよかった。いくつもの島が見える。瀬戸内海の島々だ。

「あれが月島」

舵を取りながら船長が言った。港から真つ直ぐにある島だ。

「塩飽諸島では一番でかい。でかいちゆうても、知れたもんじゃが」

四十分ほどすると、山と砂浜が徐々に近づいてくる。

「年寄りばっかになってしもた」

風が船長の言葉を運んできた。東に瀬戸大橋が見える。海の層気楼のようだ。西にゆっくりと日が落ち始めていた。ここにいる自分が不思議だった。六百km離れた世界に僕はある。何も変わらない僕がいる。

船は速度を落とし、入り江に入った。鳶が風に乗るように空高く舞っていた。

船長の奥さんが埠頭に飛び降り、ロープを巻く。船がゆっくりと横付けされる。船長が荷物を下ろす。乗客はそれを見ながら降りるのを待っている。下ろされる荷物は、日用品や食料品が殆どだ。埠頭で待っていた男や女が、荷物を受け取ると、そそくさと車に積み込み、去っていく。

老人が三人、船を降りた。最後に僕が続く。曇天。海も空も同じ

色だ。知らない土地に僕は取り残された。船の出発する音に紛れて、船長の妻が何か叫んでいる。指さしている方向に、民宿があるのだろう。携帯電話を取り出すと、圏外の表示が出ていた。海岸沿いに、道路を歩く。鷲の鳴き声が高い空から下りてくる。ピー、ヒョ、ヒョー、ピー。ヒーヒーヒー。

浜があり、海の家の、枠組みだけが残っている。誰も人はいない。もう一度携帯電話を取り出すと、液晶にアンテナが立っていた。大学へ電話をかける。僕は動物舎につないでもらう。直接教授に連絡するのは気が引けた。Kから急用が出来たと伝えてもらおう。

「はい、動物舎」

Kの眠そうな声が意外と近くで聞こえた。

「四国の島？何、それ」

「昨日、言っただろ」

「昨日かいつかは知らないけれど。チャットルームに急に入ってくるからびっくりしたよ」

「それはこつちだよ、侵入者だから君は。ところで、僕はどうすればいい」

「どうすればって」

「君は僕がキーだといった」

「知らない」

Kは簡単に言い切った。

「それより、昼間、先生を見たよ。一生懸命ラグビーをやってた」突然、電話が切れた。電話が切れると、いつも、取り残された気分になる。欠勤の連絡などどうでもよくなった。ラグビーをしているんだから。

狂っているなあと僕は思う。Kか僕か、両方が。少し砂浜を歩いてみよう。ゴミも多い。空き缶、ビニール、流木。水を掬って、口に含む。塩の味がする。海…。

僕の中にも海がある。何が棲んでいるのか？歩、直子、K、教授、雑踏の中の隣人。片方の手を辿ればみんな知ってる。もう一方の手を辿れば僕は誰も知らない。

僕の影が砂浜に長く伸びている。その影の中に鈴木さんは潜んでいるのかも知れない。砂粒の中に。

また、道路沿いに歩く。

島の巨大な観光案内図がある。周囲^{18.2}km。島を一周できる道路がある。

いろは石45基の石碑が島全体に建てられている。いろは…の47文字の頭文字をとった名言を彫りこんだもの。

さぬき大島トライアスロン大会

わくわく魚祭り

八浦を捜したが、分からなかった。時々、車が通るが、人の姿はない。

民宿「松本」の古びた看板が見えた。ガラスの引き戸を開けると、広い土間があり、ジュース、ビールを入れた冷蔵庫、日用品、自転車置いてある。雑貨屋もかねているようだ。誰もいないと思っただが、叩きに老婆が座っていたので驚いた。目が合うと、老婆は急いで目を逸らした。

「八浦に行きたいんですが」

老婆は僕の言葉を無視して、奥に消えた。

「八浦の何処へ行く？」

背後で振り返ると、六十才ぐらいの男が立っていた。

「鈴木さん」

「長か」

「ええ」

「何しに？」

「息子さんの……」

「昭彦さん帰ったはるんか」

「それで車で送ってもらおうかと」

「車はないで、せがれが丸亀まで行つとるけ」

男は上がり框に腰を下ろして、僕の顔を見上げながら言った。

「歩いたら、どのくらいかかりますか？」

「山越えやけん一時間ぐらいかのう。途中で日が暮れよる」

今から八浦へ行つても、帰りの船がないと言う。鈴木家で泊まれる保証もない。

「今晚泊めてもらえますか。アポ取ってるわけじゃなし」

「アポ？。なんよそれ。ええよ、客は誰もおらん。二階の好きな部屋つこうたらええわ」

そして、奥に向かつて、

「かあちゃん」

と、叫んだ。

奥から出てきたかあちゃんは、小太りで元気のいい女将さんだった。一階で家族が住み、二階を民宿にしているらしい。

「便所は廊下の突き当たり。ご飯はわしらと一緒にええかいな。釣りの人はいつもそうやから」

「いいですよ」

と、答えて、軋む階段を上がった。踊り場に、古い雑誌が積み重ねられている。釣りの雑誌が多い。一番手前の部屋に入った。定員6名と書いてあるのがおかしい。

「夏は海水浴で客が多いけど、今頃は土日の釣り客だけやけん」

何の飾りもない8畳ほどの部屋。日に焼けた畳。押し入れと、卓袱台。窓の外に板張りの狭い物干し台がある。僕はそこに腰をかけた、海を望めた。月がうつすらと出ている。

それも満月に近い。浜に人の姿が見える。背後に人の気配がした。「そろそろ名月やお。今年は遅いけ」

布団をひきながら、女将は言った。浜にいる集まる人の数が少し増えた。

「月見の準備にな。珍しい事に、今年は名月と八浦の祭りと重なるけ」

人の声は聞こえない。船が浜に入ってきた。4、5人が乗り込み、月に向かって漕ぎ出した。

階段の下から、

「ごはんよ」

と、女将の大きな声がした。大声で返事をして、階段を降りる。僕の足は階段の途中で止まった。

「くんばんは」

引き戸を開けて、入ってきた女に見覚えがあつた。満員の電車から消えた女。質素な身なりになっていたが、間違いなかつた。女は僕に気づいて軽く頭を下げた。

「来てしまいました」

女は不思議そうに首を傾げた。

「美耶ちゃんけ」

部屋から男の声がした。

「ポスターを張らせてもらえますか」

「ええよどこでも、なんのポスターね」

女将が答えた。

「映画の会です。山田洋二監督の「学校」です」

女は、背伸びしてポスターを張ろうと爪先だった。僕は土間に降りた。

「手伝いますよ」

ポスターを女から受け取り、位置を確認した。

「ここがいいかな」

女がはにかむようにこっくりと頷いた。

「すみません」

「どうも、この前は」

「……」

女はまた不思議そうに小首を傾げた。

「知り合い？」

二人のやり取りに、部屋から顔を出した民宿の主人が言った。

「ええ、東京で」
と、僕が言った。
「人違いです。私、東京なんか行ってません」
女が激しく首を振った。
「そうじゃ、美耶子は島を出たことがないけん」
唐突に老婆の大きな声が出た。
「ばあさんはいらん事言うな」
主人が老婆の声を遮った。
「八浦へ帰るんか」
「もう少ししたら帰る」
「明日、八浦に行きたい人がおるけ。せがれが丸亀へ行って、車がないんじゃ」
「歩きますよ」
僕が口をはさんだ。
「歩いてても一時間足らずじゃけんも、乗せていってもうた方が楽じゃ」
女は少し考えるように、前髪を指で梳いた。
「いいですよ。明日の朝、迎えに来ます」
「すみません」
「九時でいいですか」
「ええ」
彼女は踵を返した。素早い動きで、身を翻し、硝子戸を開けて、消えた。あの夜のように。

2 雑踏

朝の通勤。僕はいつもの時間に、いつものように雑踏の中に入る。
私鉄への乗り換え口に続く巨大な階段。様々な足がコンクリートの階段を上がっていく。足音が響く。コンクリートの階段を上がっていく様々な背中。無数の虫を連想する。規則正しく足音を刻む。僕も無表情に階段を上がって行く。無数の他者の中に僕はある。だが、彼らは僕の投影だから、僕を通して存在する。階段の途中で、周りの人が全て僕になる。僕の群れが一斉に階段を上がる。

内ポケットに封筒が入っていた。払い戻しも一瞬脳裏をかすめたが、卑屈な感じがして止めた。封筒を縦に裂いて、その他のゴミに放り込んだ。

大学に近づくに従って、学生の姿が目立つ。僕の通路は狭まり、一つの群れの中に入っていく。昨日の運動会も、遠い日の事のように

に思えてくる。やっとシートに腰掛ける事が出来た。

電車の中で、学生は一樣に携帯電話を構え、小さな液晶を睨んでいる。只一人異質な女学生がいた。初めて見る顔だった。扉に凭れながら本を読んでいる。背表紙に「革命revolution」とある。

「亜里砂」

と、誰かが呼んだ。彼女は、本から目を離したが、誰も近づいてくるものはいなかった。また、本に目を落とす。また、誰かが、「亜里砂」

と、呼んだ。彼女は本に目を落としたままだった。

僕は目を閉じた。

「革命か……。そんなこと書くめい」

網膜の薄い闇の中にグランドピアノがあった。その横に、地味なスーツを着た平凡な顔立ちの女学生がいた。女学生は、鍵盤蓋を開けナイフで、ピアノにこう刻んだ。

「革命」

亜里砂は、思い切り両手で鍵盤を叩いた。

「誰？」

亜里砂は僕の方を見て言った。

3 偽学生

ノーサイドの瞬間が好きだ。もう戦わなくてもいいという一瞬である。頭が真っ白になる。

練習試合でも同じだ。大の字になって空を見ていた。秋の空が高いと実感する。広げた腕にすっぽりと入る。無限を手に入れたような気持ちになる。

長い間そうしていた。土を払いながら、ゆっくりと起きあがると、グランドには誰もいなかった。日が落ちていく。僕の影がグラウンドに長く伸びていた。奇妙な喪失感があった。半分になったような。

グランドの隅に動物舎の明かりが見えた。急にKのインスタントコーヒーが飲みたくなった。僕には友達がない。Kも友達ではない。その時その時のつきあいで、事情が途切れると、そこでつきあっても途切れる。

いつものようにKは動物舎にひっそりと住んでいた。無菌箱のフードマウスに蒸留水をやり、モルモットの糞を清掃し、花子の毛繕いを手伝った。

「どうしたの？半分になっちゃって」

僕の顔を見るなりKは言った。

「そう言えば、もう半分から電話があったよ」

彼はいつもの口上を述べずにインスタントコーヒーを入れた。とても珍しい事だった。

「半分は丸亀にいるって」

「丸亀……」

話を続けるのに疲れた。僕は黙ってコーヒーを飲んだ。

「大丈夫。1/2は1/1に直ぐに戻るから。再生するよ。切っても切ってもプラナリア」

そう言つて、Kも黙つた。二人の沈黙が絡み合った。僕は半分についてぼんやりと考え、Kは全く違う事を考えているのだろう。

「偽学生がいるんだ」

唐突にKは言つた。僕は黙つて話の続きを待った。

「僕は悔しいんだ」

Kが手の甲で涙を拭いた。

「僕は一日中ここで働いているんだよ。休みなんてない。ヌードマウスなんて僕がいなけりや三日で死ぬよ。賭けたつていい。給料だつて、十万円そこそこ。時給650円で一日8時間、ひと月二十日で十二万円。なんやかや引かれて十万円そこそこ。計算される時間の倍は僕は働いている。朝はパンを囓り、昼は三百円の学食。夜は花子とバナナを分けているんだ。こんな僕に、偽学生を捕まえるつて、教務が言つてきた。僕より忙しい職員がいるつて思う」

「思わない」

「その僕にだよ。あいつらは僕が遊んでいるつて思っているんだ。あいつらより、ここにいる動物の方がずーと上等な生き物だよ。火をつけて、動物と一緒に焼け死んでやる」

Kは眼鏡を外して、汚いハンカチでレンズを拭いた。どんな人間よりも、じーと殺されるのを待っている実験動物の方が高等な生き物だと僕も思う。

「僕が偽学生を捜すよ」

Kがポカーンとした顔を僕に向けた。

「いいよ、僕がやる。捕まえて殴つてやる」

多分偽学生を捜す事は亜里砂を捜すのと同じ語だと思つた。学食で日替わり定食を食べながら、周りを観察する。定食は相変わらず不味い。一人で食事を取っている学生を注意するが、分からない。千五百人も学生がいれば、その中の一人を見つけてるのは至難だ。携帯電話の会話が飛び交う。みんな無駄話だ。僕もその中に巻き込まれる。

「誰が偽者」

「みんな偽者」

「本物？」

「誰が」

「超面白い」

「地震だ！」

トーンとテーブルを叩いて、大声を上げてやった。声がピタリと止んだ。

あつげにとられた学生を尻目に僕は学食を出た。

偽学生は男か女かも分かっていない。誰が偽学生が一人紛れていると言ったのだろうか？本人かも知れない。いつまで経っても、誰も探しに來ないので、自分から言った。「偽学生がいますよ」と。

誰も捜してくれないかくれんぼ。それなら僕が鬼になる。

一瞬、亜里砂の姿が横切った。棟から棟をつなぐ回廊を亜里砂は歩いていく。僕は男子学生の背中に隠れるようにして亜里砂を追った。亜里砂は、取り壊し工事が始まった旧校舎に向かっている。通路一杯に広がって歩く学生の間を前方も対面も巧みにすり抜けていく。誰も、亜里砂に注意を払わないのが不思議だ。学生達には亜里砂が見えていない。そのように亜里砂は歩いていく。そして、旧校舎の影にふっと消えた。その時、マナーモードに設定していた筈の携帯電話が鳴った。

「つけるの止めなよ」

かすれた女の声だった。

「私は逃げないよ。中講堂で待っているわ」

僕が何も言わないうちに電話は切れた。

旧校舎は防音布に覆われていた。誰もいない。立ち入り禁止の立て札を横目に僕は中に入った。半壊した校舎はまだ原形をとどめていた。七十年以上の歴史を刻む校門。中央にアーチ型の時計台があり、左右対称の建物がある。時計は六時三十分で止まっていた。中にはいると、中央に階段があり、一階は事務室、トイレ、階段の下には、写真部の暗室があった。懐かしさと共に、破壊された建物は過去を引き裂くようで無惨だ。少し感傷的になった時、ピアノの音が聞こえてきた。それは、最初叩きつけるような激しい音から始まり、緩やかな調べに入った。僕は音のする方を見上げた。中講堂は2階だ。多分亜里砂がランドピアノを弾いているのだ。建物と一緒にあのピアノも破壊されるのだろうか。亜里砂が弾く曲はとても悲しい曲に聞こえた。僕は、白いコンクリートの破片が散らばる階段を上がる。ピアノの音は鮮明になり、僕は違う世界に足を踏み入れる。それは壊れ行く世界だ。消えていく時間だ。

階段教室の上に僕は立った。壊れた窓から、日が微かに差し込んでいる。教室の底にランドピアノがある。ピアノの周りは暗く、

亜里砂の姿ははつきりとしなない。鍵盤を流れる指だけが白く見え
た。曲が変わる。ジャズ。ピリー・ホリデーの「奇妙な果実」。亜
里砂は音楽の海にいた。突然、曲は終わった。ゆっくりと亜里砂の
影が立ち上がった。僕は海の底へと下りていく。窓から一条の光が
白い川のように流れ、亜里砂の白い横顔が浮かび上がった。

「君は？」

亜里砂は言った。

「君こそは誰？」

「学校の職員だよ。君は？」

「山本亜里砂。私は亜里砂。なんでもありません」

いつも自己紹介はこうなのだろう。無表情に言った。

「学生証を見せてくれる」

「理由は？」

「偽学生を捜している」

学生証を出した。写真はモノクロ。彼女は親指で生年月日を隠し
た。

「薬学科三年生。僕が間違っていた。でも、ここは危ないよ。出た
方がよい」

「もう一曲、弾いたら出る」

僕は階段を上がり、一番上の席に腰を下ろした。

「奇妙な果実」の続きかが始まる。途切れた音が繋がる。僕は目
を閉じた。荒野に裸木がある。その木にリンチを受けた黒人がぶら
下がっている。誰もいない。黒人は風に揺れている。

いつの間にか音は消えていた。亜里砂と共に。

「山本亜里砂って言ったの」

Kは言った。

「去年のしかないけど」

机の上をゴソゴソ捜して、学生名簿を持ってきた。

「二年だね。山本は二人いるけど、亜里砂はいない」

名簿を僕の目の前に差し出したが、僕は見ようとしなかった。K
はコンピューターの前に座った。キーボードを打つ。

「山本亜里砂。昭和四十年入学、四十三年に中退。30年以上前こ
この大学にいたんだ。コーヒーを飲む？」

「いいよ」

僕は立ち上がった。まっすぐに教授室に行った。

途中で亜里砂からメールが入った。

「海へ」

たった一行のメールだった。

教授の部屋をノックした。何故そんな行動を取ったのか分からな

い。只、そうするべきだと思った。

K 大学への研究派遣を熱心に頼んだ。教授は驚いた後、満面に笑みを浮かべた。

「やっとその気になったか」

教授はとっておきのヘネシーを僕に勧めた。

「地道にやればいいんだよ。論文を二、三本ものにすれば、講師を約束する」

丁寧な頭を下げると、大人になった気がした。世間並みになった気がした。ざらついた気分にもなった。小さな闇を抱えたような気分にも。

4 閉ざされた無限

季節は秋のままだ。時間は同じ季節の中を循環している。水槽の中の水のように。

亜里砂からのメールは

「閉ざされた無限」海 私は海の真ん中にいる。深い水の中を漂っている。周りが全て水。何処へ行こうとしているのか？」

閉ざされた無限。研究室には誰もいない。亜里砂からのメールは薄暗い部屋の中で輝いていた。僕は閉ざされた無限について考える。亜里砂が目指している場所。時間について考える。水槽のエアの音だけがする。水槽には無数のプラナリアが次々に再生している。

次のメールが届く。

「やがて夜になり、全てが闇の中に沈む。私は船首で膝小僧を抱えて真っ直ぐに前を見ている。船は小さな漁船だ。料金を取って人を乗せてはいけなない船だ。海の白タク。乗客は密航者。行く当てのない密航者。男が指さした。

「あれが月島だ」

確かに小さな明かりが見える。私は男の名前を聞いた。

「名前はない」

重ねて聞いた。

「新吉やけ」

海の男は渋々名乗った。いつの間にか満天の星が海に降り注いだ。

携帯を折り畳み、僕は便所に行く。旧帝大の廊下は暗く長い。

メールの到着音。小便をしながら、携帯電話を開ける。

「着いたよ。あなたに会える」

偽学生のこととはあの時から聞かない。亜里砂は三十年前に帰って行ったのだろう。メールも途切れた。僕は届かないメールを返す。「君は誰？」

「百年経てば会えるかも知れない」

「百年なんて、一瞬じゃない」

やがて僕と亜里砂の境目がなくなる。

僕の半分は月島に行ったのだろうか。そこで亜里砂と出会う。水面に落ちた小さな葉っぱが少しずつ水紋を広げるように物語は始まっている。

く入り江の目立たない場所に船を浮かべ、同志からの合図を待つ。

「ほら、入ってきたよ」

携帯電話をKの目の前に差し出す。

「三十年前の彼女が携帯電話を持っている。不思議だね」

Kの目に、少し意地の悪い光が浮かんだ。彼はいつもと違う僕の様子を敏感に感じていたのだと思う。

「同志か？」

僕が咳くと、

「すたれた言葉だね」

と、コーヒーカップを勧めながら、Kは言った。

Kを尋ねた用件は他にあった。大学の決定、すなわち、くびを宣告する事だ。私大の台所もそれほど裕福でないという事。

「単刀直入に言うよ、君は解雇された」

「解雇？くびって言う事？」

「そう」

Kは黙って自分の足下を眺めていた。

「行くところがない。ホームレスか。いつまでに出て行けばいいの」

「一週間以内」

「誰が後に？」

「誰も来ない」

「どうするの彼ら」

Kは動物たちの方に目をやった。

「引き取ってもらおう、会社に」

「会社に？」

「そんな会社があるんだ。実験動物はFAXで注文。2、3日で届く」

「みんな会社だね。学食もおいしくなったし。いい事だね」

その夜、Kは花子に筋弛緩剤を注射して殺し、自分は首を吊った。
花子が死んだ頃、僕は、亜里砂から送られてきたメールをパソコンで読んでいた。

船に仰向けになり、空を見ている。私の上に無数の星がある。今は、一九七十年十月 日。少し寒い。新吉はともて海を見つめている。本当に無口な男だ。

こうして海に浮かび、夜空を見ていると、とても切ない気持ちになる。時々涙がスーと頬をつたう。

祐介はこの島に帰ったはずだ。

至急に、来島、願う。事態は切迫している。頼む人は君しかない。

「至急に、来島、願う。事態は切迫している。頼む人は君しかない。」

手紙を海にそっと流す。しばらく漂い、波間に、ふっと、消えた。小さな嘘。

新吉に話しかける。

「いつまで待つのか？」

「あそこに灯りがつくけ」

山腹を指さしながら、また、同じ返事が返ってくる。

私の父は開業医だった。中流家庭というところかなあ。苦勞知らずで大きくなった。だが、いつも心の中は空虚だった。空っぽだった。そんな事を言えば、多分大人達は口を揃えて贅沢だと言う。絶えず死に直面していた戦争中を考えると、空腹を考えると。広島、長崎を思え。でも、私には、実感するものとして戦争も、空腹も、広島も、長崎もなかった。

理解不可能な他人ばかりがいた。父や母もその中の一人だった。大学は、父が薬剤師がいいだろうという事で決まった。特別に反対する理由もなかった。父は、顔もスタイルも悪い私は、嫁に行き遅れても資格があればと思ったのだ。

私は階段教室の一番前の席にいた。教授の講義は聴き取りにくく、ものすごく退屈だったが、ここにいれば落ち着く事が出来た。一列目のメンバーは決まっている。私以外はみんな眼鏡をかけた女だ。

亜里砂からのメールが終わると、Kからのメールが届いた。命乞いかな。

@花子はどうするの。

@知らない。返信

最初はそう言う科白で始まった。

Kのメールは1行ずつ次々に送られてくる。乱打だ。キーボードの乱れ打ちだ。

@僕はね、T大の医学部を卒業したんだ。僕には、特殊な才能があった。多分。

@最初は誰でもそうだろうと思っていただけ、違っらしい。

@僕はカメラ。

@本のページをそっくり頭の中に写し取る事が出来る。理解は出来ないけど。

@殆どの学科は満点。

@でも、数学は出来ない。

@数学は公文式だ。これでいけた。
数秒間の沈黙。

@僕は自分が生きているという事が希薄だった。今でも。

@医学部を卒業して、解剖ばかりやっていた。

@生と死の境目を探した。何処かにあるはずだと思った。

@死とは二度と動かない事だよ。返信

@何故動かない？

@死んでいるから。返信

@いたちごっこだよ。

@だったら、死んでみるよ。返信

@そうする。

@冗談！ 返信

@そのつもりでメールをしている。

@止めるよ。冗談だつて。

@馬鹿は死ななきゃ直らない。花子は死んだよ。僕が殺した。僕が花子にしてあげられるのはそれくらいだよ。

僕は急いで大学に電話をかけた。誰も出ない。出ないはずだ。午後九時以降は動物舎に繋がるはずだから。一一九番か一一〇番。迷ったが止めた。僕には関係のない事だ。

@メールは全部消しておくよ。またパソコンの前に戻った。

@僕も消す。返信

@OK。感謝する。

亜里砂からメールが入った。
「合図があつた。一九七十年十月 日。もうすぐ祭りだという。
太鼓の音がする。亜里砂。」

5 美耶子

階段の下にある電話があつた。

「電話を借りていいですか」

「ええよ」

居間から、女将さんの声が返ってきた。

「電話代はそこに置いていたらええけ」

主人の声が続いた。

家にかけたが、繋がらなかつた。安堵の溜息が出た。僕が電話に出るかも知れないという恐怖があつた。そうなれば僕が精神が異常をきたしているのが明らかになる。それよりも、姿のない失踪者の方がましだ。繋がらなかつたと説明するのも面倒なので、百円玉を電話機のそばに置いた。

民宿の家族と一緒に同じものを食べる。名前の知らない魚だが結構うまい。

「東京の人じゃのう？」

女将が聞いた。

「まあ、そのあたりです」

「言葉で分かるけん。珍しいな、東京の人がこんな田舎にくるんわ。テレビ、みる」

「いいえ」

「長おさの昭彦さんは東京で学者やってるいうてたなあ。お客さんも学者さん」

「学生に毛の生えたようなもんですよ」

「学生に毛が生えたら、なんになるね」

女将が卑猥な笑い声をたてた。

古い先祖の写真が鴨居の壁に掛かっている。シルクハットを被っている老人もいる。僕の視線を辿って女将さんが言った。

「この島からようけの人がハワイに移民したけ」

「ハワイ」

「せや、ハワイ。なんせ水島水軍の流れをくんどるけ。明治の頃

や。あのシルクハット被っているは私の曾おじいちゃんや。ハワイで帽子屋やって、成功したんやけど。戦争で島に帰って、もうけたもんみんな、お国に差し出して、すっからかん」

主人は黙って飯を食っている。多分養子なんだと思う。

「さっきの人は？」

「美耶ちゃん？」

「ええ」

「変わった子でね。島から一步も出たことがないんや」

僕は箸を止めた。女将は続けた。

「出られんって言うた方がええわ。八浦には昔分校があつたけ、そこしか出とらん。丸亀の中学も、高校も行けんじやった。頭のええ子じゃのに」

「だから、東京で会うわけがないと」

「そうじゃ、美耶子は、この島を出たことがないけ」

主人がぼそつと言った。

「会いましたよ。この島に来るようになって、彼女から聞いたんですよ。それとも双子」

「双子はあんたじゃろ」

「老婆がおかしそうに笑いながら言った。

「長おさの昭彦にそっくりじゃ」

老婆は体を小刻みに揺らした。小さくてかわいらしい婆さんなんだ。

「馬鹿言え、何処が似とるな」

主人が言った。

「元々、長おさは島の人間じゃない。先祖は島に流れ着いた乞食じゃ」

老婆が言った。

「ぼけが段々ひどくなる」

主人が、僕にビールを注ぎながら言った。

「美耶子は、優しいけ、お前なんかよりずーと優しい」

と、言つて、老婆は主人を睨んだ。主人は老婆から目を逸らす。

「あの子は、むしろに優しいけ。あの子は神様の子じゃわ。極楽へ行かせてくれるんや。お前」

老婆は主人の顔を覗き込む。

「もう頼んでくれたんか」

「何をあほなことを言うてる」

主人が言った。会話が途切れた。老婆は箸を持ったまま、こつくり、こつくりと、船をこぎ出した。女将が箸を取ると、崩れるように横になった。

「ばあちゃん寝間にいかな」

老婆の世話をしながら、女将は僕の方を見て、言った。

「美耶子さんは五つの時に大きな波にのまれてなあ。それから、水を怖がるようになったけ。船にも乗れん。ここはまわりが、みんな水じゃけん」

五つ……。一瞬、喘ぎながらゴールを目指す歩の姿が目に見え

た。

だ。

だ。

だ。

だ。

だ。

部屋に戻ると、月は天空にあつた。浜には人の姿はない。打ち寄せる波の音がかすかに聞こえた。浜に小さな光が見えた。目をこらすと、小さな女の子が、明かりの中を歩いて行く。月の光が照らしているようにも見える。大きな波が来た。はつと息をのむと、少女の姿も、明かりも消えていた。あれは美耶子さんなのだろうか。海に消えた少女に、彼女の面影があつた。

次の日の九時には美耶子さんはやつて来なかつた。柱時計が十一時を打った。数を勘定しながら僕は言った。

「九時つて言つてましたね」

土間で、自転車に空気を入れている主人に聞いた。

「何が？」

「美耶子さんが来るつて」

「島時間やけなあ」

「島時間？」

「早くもなれば遅くもなる」

「のんびりしてるですか」

「だらしがないんよ、俺もだけど。だけど、島じゃ誰も人は待たんけ。待つ方も何かしとる」

主人は笑いながら言った。なるほど僕は思う。人と会うというのはそんなものかも知れない。だから、宿代を払い、荷物を持って僕も外へ出た。浜に下りると、蟹を見つけた。追いかける。

「お客さん」

名も知らない男を呼ぶのに適当な言葉が見つからないのだろう。

美耶子さんが、道路から手を振っている。藍色の事務服は制服なんだろう。僕は彼女を見上げる。形のいい足が、紺色のスカートからすーと伸びていた。

「何をしていますのですか」

「蟹を追いかけていた」

「蟹を？」

「蟹はなぜ横に歩くか知っていますか？」

彼女は首を振る。

「前に歩くと足が絡まるからですよ」

美耶子さんは予想以上に笑った。

笑い止むのを待って、

「迷惑じゃなかつた？」

と、僕は言った。

「いいえ、八浦で用事がありますから」

と、彼女は言った。軽自動車に乗り込むと、

「シートベルトはキツチリと付けて下さいね。時々、谷に落ちます

から」

今度は僕が笑ったが、数分後あながち冗談でもない事が分かる。八浦への細い山道を上がっていく。最初の坂でエンスト。対向車が来ないか気になる。いろは石が、次々に現れる。

いは「祈り」

労

類は友を呼ぶ

夢

「この島は石で有名なんですよ。八浦の次の部落には、大きな採掘場があります。村おこしのお金で、いろは石をつくって、「い」から順番に、島のおちこちに置いたんです」

軽自動車の狭い車内で、僕は助手席に乗って、美耶子さんの話を聞いた。時々、僕の方を見て喋るので、谷に落ちないかと不安になる。だが、ずいぶん慣れた道なのだろう、車は滑るようにカーブを切っていく。だが、下手な運転だ。不意に思い切り急ブレーキを踏む。

近くにいるのに彼女には匂いが無い。香水やファンデーションの匂いが無い。彼女の肌はきめ細かく、全く化粧をしていない。口紅さえ引いていない。長いまつげが、涼しい一重まぶたに落ちている。

僕は東京で彼女と出会ったことを繰り返さなかったが、彼女の方から尋ねた。

「東京で出会った私は」

少し口ごもった後、思い切ったように、

「どういう印象でしたか？」

「素敵だった」

僕は即座に答えた。そして、続けた。

「とても」

居酒屋の事を端折って、電車の中の事をかいつまんで話した。

「私がそういったのですか？」

彼女は笑いながら言った。僕は真剣な顔をして頷く。

「言ったかもしれない」

彼女はそう言った後、淋しげな横顔を見せた。

「でも、私は島にいました。私は海を渡れないから」

車が峠で止まった。

「降りましょう。ここから、八浦が一望できます」

入り江に佇む二十軒ほどの集落。肩を寄せているものも、ポツンと離れているものもある。海辺に建つ家、山の中腹に見える屋根。殆どが平屋で、同じ建て方に見える。

「人のいない家が多くなりました」

美耶子さんは小さく言った。人が住まないと、家は自分から崩れていきます」

海には曇天の雲が落ちていた。空と海とが重なり、その向こうにある島や陸地は、薄い墨絵のように、空と海に流れた。動くものは何も無い静謐な風景だった。

二人は肩を並べて黙っていた。沈黙がこの風景によく似合っていた。

鳥の鳴き声と、羽ばたく音がした。鳥の姿は見えない。二人は海に向かって少し歩いた。

「都会って、沢山の人がいるんですね」

「そう、うじゃうじゃいる。そこで、自分が自分であることが難しい」

「ここには、私しかない」

彼女はぼつりと言った。

車に引き返す途中に、

「私は巫女にもなるんです」

と、唐突に言った。

「巫女ですか」

「ええ」

彼女は笑顔を浮かべて鈴を振る仕草をした。

「福利厚生課の仕事です。八浦には神主はいないんですよ。大きな神事がある時は、神主は船に乗って丸亀から来ます。今年の祭りに来ますよ」

「秋祭り？」

「祭りは一年に一個しかありません」

峠を下り、海岸沿いに少し走り、車が止まった。集落の道は狭く、車は入れないのだ。公園に車を止めた。

「あの屋根が私の家です。浜に一番近いから、屋号は浜屋です」
わずかに屋根が望める家を指さした。

「荷物を置きに行きます。あなたも」

「僕はいいです」

「誰もいませんから」

結局、荷物を家に置いて、鈴木家への道の途中まで案内し、彼女は自分の仕事を済ませ、一時間後にまた、江浦に帰るという段取りになった。

僕が携帯を確認するのを見て、

「遅くなるようでしたら電話をします。携帯電話は持ってないけど、家の電話で」

「でも、ここでは使えないんですよ。圏外になっている」

「こんなに近くでも通じない？。意外と不便なんですね」
彼女は笑った。

「役場でITの講習会をしたですよ。漁師さんや女将さんなんかが集まって。八十才のおばあちゃんまで。ホームページを作ったんですよ。私も写真に写っています」

「そりゃ大変だ。ここはコンピューターと合わないなあ」

「ワイプロは使ってますよ、エクセルなんかも少し」

美耶子さんは少し、ムキになって言った。僕は彼女の子供のような反応が楽しかった。墓地の横を通り、わずかな勾配の坂道を下りていく。墓はみんな海に向いていた。

「まだ、土葬なんですよ。町で骨にして帰る人も増えましたけれど」

墓の中に、矩形の高さが三十センチほどで、木の柱で作った作り物があり、屋根がのっている。家の形に似せているのだろう。中に笠が見えた。あの世への旅立ちを暗示しているのかも知れない。横に杖が砂地に刺してある。

「土に埋めて、3年ほど経つと、木の棺が落ちます。その頃に石の墓を建てるのです。でも、このごろは何年もあのままの人もいます。忘れ去られて」

彼女は死者を「人」と言った。細い道は海へと続いている。

曇天が変わり、低い雲が激しく動いていた。老人が海を見ている。

「新吉老です。まだ、六十半ばなのに、そう呼ばれています。九十近いおばあさんもそう呼ぶんですよ」

新吉老が海に向かって歌い始めた。同時に奇妙な手の動きが始まった。

「嵐が来る」

美耶子さんは言った。

稲妻が光った。海に垂直に落ちた。雷鳴が轟き、強風が高い波を呼んだ。

「長まで行くのは遠すぎます。私の家で嵐が通り過ぎるまで待ちましよう」

美耶子さんの言葉が終わらないうちに、横殴りの激しい雨が降り出した。新吉老の着物は、風にちぎれんばかりだ。

「大丈夫かなあ、あの人」

「嵐の中で船を漕いでいる。三十年前の海に。誰も行くことの出来ない場所に」

彼女は僕には意味不明な事を口走った。

ぐしょ濡れになった二人はどちらからともなく手をつないだ。体

に当たる痛いほどの水を浴びながら、僕の中にある何かが解き放されるのを感じた。

二人は走り出した。雷鳴か響いた。振り返ると、火柱が海に落ちた。

門を駆け抜ける。全身がずぶ濡れた。引き戸を急いで開けて、土間に走り込む。激しい息をする。雨にくっしより濡れた美耶子さんの体が透けて見える。彼女は土間を駆け上がった。バスタオルを持って上がり框に立った。僕の頭にタオルかけて、ゴシゴシと擦った。

頭が美耶子さんの腰にあたる。子供の頃の記憶が蘇る。強い雨の中を帰ってきた兄弟は、母に頭をゴシゴシされた。母の足の間、二人の頭はすっぱりと隠れた。兄弟……。

「風邪を引いたら、大変」

美耶子さんの声なのか、母の声なのか、僕には分からなかった。バスタオルが取れると、彼女は自分の頭を同じタオルで拭いた。黒髪から水滴が落ちる。

「どうしよう、男の人の着替えはないし」

新しいタオルを僕に渡しながらか言った。

「下着はあります」

「よかった」

美耶子さんは奥の部屋にいった。そして、躊躇せずに服を脱いだ。僕は後ろを向いて、上がりかまちに腰を下ろした。

土間の片隅に、床が張ってあり、小さなシステムキッチンがあった。

僕は浴衣を借り、美耶子さんは白いガウンを羽織った。障子を開けっ放した十畳ほどの広い部屋で二人は肩を並べて廊下越しに庭を見ている。手入れのされていない庭。名も知らない白い花が咲いていた。雑草と生えるにまかせた木。それでも、雨で洗われた庭は美しかった。南側に門があり、門には屋根がある。その両側は部屋になっっている。門というより、細長い家が門の代わりをしている。

雨脚は少し弱まったようだ。

二人とも何も喋らない。二人がそれぞれ過ごした今までの時間を無言の中で語り合っているように。

ここにこうしている不思議さは全くない。こうして僕も失踪者たちの一人に加わるのかも知れない。

門の屋根越しに山が見える。霧が山の中腹にかかっている。

雨脚は細くなり、やがて消えた。

美耶子さんが立ち上がる気配がした。ガウンを脱ぐと、その下に巫女の衣装が現れた。仕事は巫女を務める事だろうか。ぼんやりと

古い時計を眺めていた。秒針が時を刻む。ふっと、眠気がした。薄くなつた光景に、白い服が過ぎつた。そして、秒針が止まった。

古い時計の秒針が、また、動き始めた。門に、薄いオレンジ色の服を着た美耶子さんが立っていた。どれくらい眠つただろう。

「服を借りてきたの」

紙袋から、背広を取り出す。

「そうだね。まさかこの格好じゃ行けない」

女物の浴衣の袖を広げる。

「奴さんだよ」

あちこち飛び回るが、彼女はつまらなさそうに僕を見ている。

借りてきてくれた服は時代遅れなものだった。老人のいつちよらいなのだそうだ。

「いつちよらいってなんだ。」

「少し窮屈だけれど、体を合わせるよ」

「ネクタイは？」

「いいよ、元々しないから」

美耶子さんは冗談ばく、一緒に借りてきた山高帽を僕の頭にかぶせた。「奴さんだよ」もう一回やりたいが、やらない。これ以上やったら、彼女が僕を見捨てる可能性がある。二人は外へ出た。

先ほど荒れ狂つた海は、打つて変わつて静かだ。

「海は毎日違う」

浜を歩きながら、美耶子さんは言う。

「空も違う」

僕は、パンを囓っている。冷蔵庫に入っていたパンでかなり堅い。

「海は空を映して、空は海を映している」

僕は彼女の哲学的な言葉を無視した。

入り江を周り、岬までやって来た。

「ここから、山の方に」

美耶子さんは指さした。

「家は一つしかないから」

ここからは単独行動になる。「オッス」といちびりたいが、我慢する。

いちびりつてなんだ。

「役場に帰ります。ET講習会の準備」

「いいですよ」

言葉に詰まる。

「でも、俺は何をしに行くのだったけ」

美耶子さんが体を抜って笑う。
「それって、私も一番知りたい事ですよ」

山道を上がる。最初の道を右に、次に鳥居がある方の道を。そこから一本道だから迷う事はないと美耶子さんは言った。途中に小さな石の鳥居があった。旗が二本立っている。祭りの準備なのだろう。「奉獻加茂神社大明神」そう読めた。もう一本には「塩釜神社」。旗は先ほどの雨にぐっしりと濡れていた。

僕はこの鳥居を知っている。中に小さな社があり、龍がいる。夢の中の世界にやって来た。

道は何回もくねった。竹藪の横を抜ける時、竹の間から古家が見えた。

「鈴木」と書いた表札。九十才の老人が一人で住む家はシーンとしていた。戸を静かに引く。庭があり、今は使っていないと思われる井戸がある。

殆ど美耶子さんの家と同じだ。庭にはべの木がある。鳥の家では好んで植えられている木だ。小さな池もある。長おさの家は、特に広いというのではない。平屋で細長い家。廊下が庭に面している。雨戸が閉まっていて家の中は見えない。

玄関は木造で古い。敷居は高く、板戸がはまっている。開けると鍵は掛かっていない。僕は靴を脱いで部屋に上がり、靴を縁の下に隠した。囲炉裏があり、奥の部屋には仏壇があった。昭和天皇・皇后の写真が飾ってある。部屋の奥は襖になっている。もう一つ部屋があるのだろうか。

仏壇のある部屋にはいる。こそ泥になった気分だ。襖を開ける。はっと息をのんだ。畳の幅ほどの板張りははさんで、格子が嵌った部屋があった。部屋には、床を切り取っただけのむき出しの便所と奥に畳が2枚ある。部屋の隅に人影がある。薄暗く顔は見えない。

「鈴木さん」

声を潜めて呼んだ。影が揺れた。男がゆっくりと顔を上げた。僕とそっくりの顔があった。

「人は意味が分からないと、名付けられないとパニックを起こさない」

地下鉄サリンの現場にいた辺見庸はそう言っている。確かにそうだと思う。

「僕は冷静にその現場から逃げ出そうとした。僕は奇妙な世界に紛れ込んだのだ。」

「みんなしゃがんでいる人を跨ぐようにして職場に急ぐんです」
辺見庸はそうも言っている。

後ずさりした僕に彼が声をかけた。

「日向君か。来てくれたんだね」

静かな声だった。逃げ出そうとする気持ちは跡形もなく消えた。

「どうしたんだ？」

「夢を見ているのか……。俺とそっくり」

「当たり前だよ、俺達は双子じゃないか。僕らは元を正せばたった一個の細胞の出会いなんだよ。それが二つや三つに分かれても。元は一つの受精卵。それが分裂する。プランナリアのように無数の自分が再生する。それが僕だ。それが君の中の僕だ。それが君だ。それが僕の中の君だ」

「監禁は犯罪だ。警察に知らせるよ」

「警察」

彼は笑った。

「丸亀から警官がやってくる間に、俺は海の底に沈められているよ。島のみんなは、そんな男は来ていないって口を揃えるだろう。

そう言えば俺は存在しないことになる。俺を閉じこめているのは座敷牢じゃない、海なんだ」

「どうすればいい」

いつの間にか格子を間に僕らは向かい合っている。鏡を見ているようだ。

「その前に分かって欲しい。俺を解放することは君を解放することと同じなんだよ」

「分かっている」

とりあえず答える。

「鍵は仏壇の抽出にある。木製の小物入れだよ。磯吉爺は大事なものはみんなそこに入れる」

「木製の小物入れ……。取ってくる」

「今は拙い。逃げても直ぐに捕まる。島の人間が総出で山狩りをする。さつきも言っただろう問題は海なんだ。ああ、君は頭が悪いなあ」

「ありがとう、その点は自信がある」

「船だよ、船。梅婆が言っていた」

「梅婆？」

「僕の飯を運ぶ婆さんだよ。粗末なもんばかりなんだけど、味はなかなかのもんだ。ここにいとね、食う事、寝る事、排泄する事。それだけが楽しみなんだよ。寝てしまえば、どんな夢を見たって自由。眠っている時が一番幸せ。たとえ悪夢だろうと。ああ、船の話をしていたんだっけ。久し振りに人と話すと夢中になっちゃおう。島出身の大金持ちの息子が、3日後の祭りに自家用のクルーザーで帰ってくる。船長さんって村の人は彼の事を呼ぶ。そいつを手に入

れたら、本土へひとつ飛びだよ」

僕から一間ほど離れて、いつの間にかやせた猫が座っていた。汚い茶色の猫だ。

「アシユラか」

鈴木さんはふらりと立ち上がった。右手に魚の骨をつまんで、左手に本を持ってこちらにやってきた。

「君はアシユラというマンガを知っているか？」

僕が首を振る。

「俺も知らなかった。前の住民が読書好きでね。ほら、あんなにある。全てが三十年以上前の本だよ。マンガが多いけど。」あしたのジョー」は全部揃っている」

指さす方を見ると、部屋の隅に、うずたかく積まれた本の山らしいのが微かに見える。

「これがアシユラ」

なんとというすごい顔なんだろう。

「こいつ人を殺して食っちゃうんだぞ」

鈴木さんは楽しそうに笑った。

「アシユラのために、飯を残す。鯉節が欲しいって梅婆に言うと、梅婆がね、あんた、猫みたいなものが好きなんだねって言うんだよ」

鈴木さんはとてもおかしそうに笑う。アシユラは不味そうに骨を噛っている。

「襖を開けて入ってきて、襖を閉めて出て行くんだ。この島の猫はそのぐらいの事が出来なくちゃ生きていけない。なにしろ全部野良猫だから」

鈴木さんの言うように、アシユラは襖を閉めていつの間にか消えていた。

「ここは、閉ざされた無限なんだ」

「閉ざされた無限？」

「安部公房の小説「燃えつきた地図」を読んだ事がある？」

「ない。小説は読まない」

「裏表紙に書かれている。キーワードの「都会」を消すと、この事を言っているように僕には聞こえる」

彼は畳を指さす。

「閉ざされた無限。けっして迷う事の出来ない迷路。すべての区画に、そっくり同じ番地がふられた、僕だけの地図。だから僕は、道を見失っても、迷う事は出来ないのだ」。うる覚えだから、間違っているかも知れない。ここには全てがあるともし、何も無いとも言える。二つは同意語なんだ僕は同じ区画の迷路を彷徨う。全ての時間がここにある。立ち止まりもせず、立ち去りもせず」

「結局は自分の中でしか生きられないという事。閉ざされた無限とは自分の世界という事か」

僕が言葉を挟む。

「言葉で真実を伝える事は多分出来ないと思う。真実とは何か？永遠に混じり合わない絵の具。君とこうして対座している事が真実なのか？もつと他にあるのかも知れない。小さな虫の思考のような真実が」

庭で音がした。

「鳥だよ。磯吉爺はまだ帰らない。ゲートボールをしている。元気なもんだよ。婆さんの尻を撫でるぐらいにね」

顎に手をやり、彼は何かを考える。

「どぶろくがあるんだ」

闇の中から、鈴木さんは言った。唐突な言葉に意味が分からず聞き返した。

「どぶろく？」

「磯吉爺が作っている。なかなかのもんだ。島のもんは酒も自分で造る」

「密造酒」

「米を作る百姓が酒を造って何が悪い。税金のかたまりを飲んでいる俺達があほなんだよ。とにかく再会を祝して一杯飲もう」

土間は小綺麗に整理され、什器も棚に整然と並んでいた。古い甕があり、蓋に小さな柄杓がのつていた。多分これだろうと蓋を取った。ツーと酒の匂いがした。ビールやチューハイに慣れた舌に馴染みそうになかった。湯飲みに半分ほど入れた。

「君は飲まないのか？」

湯飲みを両手でもって、旨そうに一口啜った後で鈴木さんは言った。僕は首を振る。

「都会人には合わないかも知れないなあ」

閉ざされた無限の中で鈴木さんは呟いた。飲み終えた湯飲みを格子の間から差し出した。

「きれいに洗って下さい。磯吉爺はきれい好きだから」

そう言うってから、鈴木さんは奥に行き畳の上に横たわった。僕は音を立てず立ち上がった。

「祭りの日。船の事は忘れるな。美耶子も海を渡る」

鈴木さんは背中を向けたまま、言葉を一区切りずつ言った。

そつと、襖を閉めた。廊下に出ると、ゲートボールのステイックを持った老人が庭に立っていた。老人は僕を見ても驚いた風ではなく。ステイックを木に立てかけ、井戸の水で足を洗い出した。

「お帰り」

老人は僕に近づいてくる。磯吉爺なのだろう。

「鈴木さんに呼ばれてきました」

「鈴木？なんで？」

「閉じこめられてる。助けてくれと」

「ああ、そうや。閉じこめとかな、何しよるかわからんけ。祐介、久しぶりじゃけん。ここに座れ」

「僕はあなたに会うのは初めてです」

磯吉爺は、訝しげに僕を見た。

「わしに会ったことがない……。不思議やなあ、こんなこまい時から、知ってるに。祐介」

「僕は祐介じゃない」

「まあ、そんな事はどうでもいいけ」

ゆつくりと煙草を取り出し、旨そうに吸った。一センチほど吸い、煙草の先を指で潰して火を消した。

細かい雨が降り始めている。磯吉爺がほとんどなくなった煙草を雨の中に投げた。ゆつくり立ち上がり、縁側の端に置いてある傘を取り、さす。ゆつくり歩き始める。庭の隅に鶏小屋がある。磯吉爺はその方向に歩く。日が射す。狐の嫁入り。

爺が鶏小屋を開けた。鶏が三、四羽飛び出す。だが、庭は静かだ。ゆつくりと元の縁側に戻る磯吉爺。卵を一つ手に持っている。

細かい雨の中に光りが舞う。

僕は、突然、鶏を追い始める。

「祐介」

「祐介？」

問い返しても、爺の表情は動かない。遠い昔を見るような目だと思つた。

「お前も鶏を追いかけるのが好きやったなあ。追いかけてる内に道が消えたんか。亜里砂は双子を産んだ。一人はお前の子で、一人は俺の子か。二人ともお前の子か。二人ともわしの子か」

「亜里砂って、誰？」

「もうすぐお前に会いに来るけ」

また、鶏を追いかける僕。逃げる鶏。

「鶏一羽よう捕まえん奴が」

磯吉爺が卵を割り、ゆつくりと口の中に流し込んだ。鶏を追いかけた僕が磯吉爺の足元に屈み込み、磯吉爺を見上げた。爺は、ホツホと奇妙な笑い声を上げた。そして、立ち上がった。

「籠に水をやりに行く。お前も来るか」

「籠？」

夢の光景が蘇る。磯吉爺はバケツを僕に渡した。

「水を汲んでこい」

言いつけて、爺はさつさと歩き出した。僕は井戸で水をバケツに入れて、爺の後を追った。

僕は夢の景色を歩き出す。

門を出て、来た道を下りる。小さな石の鳥居を通る。短い石畳があつて、その奥に小さな社がある。

いつの間にか日は傾きかけていた。長い影が地を這っていた。

「ここに龍がおる」

磯吉爺が御堂の板戸を開けた。

「覗いて見、天井におるけ」

僕は上半身の中に入れた。天井を見上げるが何も見えない。もう少し戸を開ける。暗闇に光りが少し入る。闇の中に龍の目が光ったように思った瞬間、どんと背中を突かれた。僕は御堂の中に飛び込んだ。同時にピシヤリと戸が閉まった。全くの闇の中に飛び込んだ。戸を開けようとするが、外からの力が老人と思えぬほど強い。

「光りがなけりや、なんも見えん」

僕は戸を開けるのを止めた。いざとなつたら、戸を蹴破るのは動作のない事だと思ふ。外から、爺の声が聞こえてくる。

「何時のことかわからん、乞食が、島に流れてきよつた。家の人、がこの御堂に泊めてやつたんや。そしたら、乞食は天井板を外して、奇妙な絵を描き始めよつた。それをな、天井に嵌め込めば、龍が一匹生まれた」

闇の中で龍が見えた。天井は無限の空になり、龍は空に激しく動いていた。僕の周りが海になった。雲が激しく飛ぶ。稲妻が雲を切り裂いた。龍の目が赤く光った。

「その乞食が、わしの先祖や。前の家が途絶え時、取って代わつた。何故途絶えたかは知らん」

節穴から漏れていた光がすーと消えた。板戸を開けると、なんの抵抗もなしに開いた。

砂浜で、ぼんやりと海を見ていた。打ち寄せる波が、今日の出来事を洗い流す。過去は幻にすぎないのか？今自分が過去なのか。海を見ているとその境目があやふやになる。砂浜に伸びた長い影が僕なのか？影と僕の境目もあやふやになる。生と死の境目があやふやになる。

遠いところへ来たと思ひながらも、この場所はいつとも僕のすぐそばにあつたのかも知れない。

僕の影にもう一つの影が重なり、横に腰を下ろした。

「今夜は泊まりますね」

「ええ」

海を見たまま答えた。山の端に日が落ちて行く。

「ああ、一日が終わる」
美耶子さんは大きく伸びをした。
「一日って一瞬だわ」
美耶子さんはスカートの砂を払って立ち上がった。
「きつと、一生も」
日はすでに没していた。

「何にもないんですよ」
卓袱台に、刺身、焼き魚、ほうれん草、貝のみそ汁が並んだ。
「とんでもない、こんなにごちそう」
「ビール、飲みますか？」
黙っている、ビールを出した。コップが二つ並んだ。彼女が僕の
コップに注ぎ、次に自分のコップに注いだ。居酒屋で日本酒を飲
んだように、スーと一息で飲んだ。僕も慌てて飲んだ。

「おいしい」
と、言つて、手の甲で唇をスーと拭つた。

「広い家で一人は怖くない」

「馴れてますから」

「旨いなあ。新鮮だ」

「魚ぐらいしかなないから。なーんにもない」

「魚は潮の香りがした。」

「何にもない。テレビもない。時間が過ぎるのがゆつたりしている
ね」

「昔は沢山の人がいたのよ。戦争中なんか、疎開の人が沢山やって
きて、二十人ぐらいいたって聞いた。時々ね、沢山の人が喋るのを
聞くことがあるわ」

「何を喋っているの？」

「海のこと、子どものこと、たわいもない話。私の小さい頃も、両
親に弟、おばあちゃんがいた。今は誰もいなくなった。私一人が残
つた」

土間でコオロギが鳴き出した。ごはんのお代わりをして、ビール
をもう一本、二人で分けた。二人は殆ど黙っていた。

「ご飯が済んだら、隠居部屋に行きましょう。私のコレクションを見
ましょう」

美耶子さんが弾んだ声で言った。

「隠居部屋にはおばあちゃんが住んでいたの」

隠居部屋は、門の左横の八畳の部屋だった。母屋から庭に出る。
庭には秋の気配が濃く漂っている。虫の声と、月は中空にある。
老朽した上がり框、木の引き戸、隠居部屋は廃墟のような気配が

した。

8 畳一間の部屋に、ランプが所狭しと置いてある。ざーと数えても、二十はある。

「ランプ。本物を見るのは初めてだ」

「八浦の家には、二つや三つ必ずランプあるの。電気が来ていない頃はランプで生活していた」

「沢山あるね」

「もらって回って、こんなに集まった。今でも、美耶ちゃん、ランプが出てきたよって、持ってきてくれる人がいるの」

美耶子さんははしゃいだ声で言った。二人は座った。僕はあぐらをかき、美耶子さんは両足を横に流した。僕は彼女が素足なのに初めて気づいた。素早く目を逸らした。

「火を点けてみようか」

「今日は全部点けよう」

一つ一つ火を点け、二人の周りに置いていく。ランプの輪に、二人の場所が狭められる。

「おばあさんが言っていたわ。ランプの火屋を磨くのが子どもの仕事だったって」

「電気を消すね」

僕は立ち上がり、電球のスイッチを切った。

炎の光。燃える光。カーキ色の光。太古からあった灯り。いつか消える灯り。

「きれいな」

僕が言う。二人の顔が近づく。次々にランプに火が入る。僕は美耶子さんの肩を抱いた。性的な感じはなかった。死の宴に近かった。僕は何度も射精した。射精の後の虚無感もなかった。死の奇跡を描くように射精した。美耶子さんにも性的な反応はなかった。僕を慈しむように受け入れた。僕を憐れむように受け入れた。僕の髪を指で梳きながら彼女は何か小さく言った。

「何？」

僕は聞き返す。

「おばあちゃんをね」

「おばあちゃんがどうしたの」

「六つの時、私はおばあちゃんを殺した。ここで」

「五つの時に波にさらわれた」

「そう。五つで死んで六つでおばあちゃんを殺した」

ランプの明かりの中に、少女の美耶子さんが現れるのが見えた。襖を開けて、入ってくる。

「おばあちゃんが、好きだったから」

少女の美耶子さんは、布団の中の老婆に声をかける。布団の端を

パタパタと叩く。

「おばあちゃん、おばあちゃん」

僕と美耶子さんは抱き合いながら少女を見ている。

「何度呼びかけても、おばあちゃんは寝ている。私は何気なしに、おばあちゃんの口と鼻を手のひらで押さえたの。そうして欲しいって、おばあちゃんが言ったような気がしたの」

「嘘だよ、子どもの力で無理だ。偶然が重なったんだ」

「嘘じゃないよ。おばあちゃんは神様になったんだから」

美耶子さん弾んだ声でそう言った。

目覚めると美耶子さんの姿はなかった。ランプの中で僕は眠ったらしい。一つだけランプが燃えていた。

時計をランプに翳して見る。5時を少し過ぎている。家ではこの時間に起きていた。朝食を取りながら、超早朝番組「おはようコール」を見る。その間に新聞も読む。食後のコーヒーも飲む。いつも元気な関根友実さん。お天気の本木さん。怒りまくる山本健治、通称やまけん。そこにあった日常は失われてしまったのだろうか？

8時過ぎに美耶子さんが隠居部屋に来た。

「ごはんですよ」

母屋で差し向かいで朝食をとった。二人とも何も言わない。

食事の後、塩釜神社に行く事になった。役場に行く近道だといった。鈴木さんの目的だったプラナリアがいる。鈴木さんが島にやってきたのは去年の祭りの頃だという。多分、長おさとは何の関係もない人だった。僕も祐介なんだから。島に入ると彼は長おさの人となり、僕と双子になったのだらう。彼は昆虫採集に来たような服装だった。安部公房の「砂の女」のような。ただ、金魚すくいのポイのような小さな網を腰に差していた。

僕と美耶子さんは肩を並べて山道を上がっていった。

道ばたには彼岸花が咲いていた。僕は息が切れた。

「いつもは役場まで歩くんですよ」

「健康のために」

「いいえ、歩くのが好きなんです。季節が移るのが分かるから」

「確かに」

と、僕は言う。都会には季節がない。

すすきが風になびく。名も知らない鳥が、突然飛び出した。

やがて海が見えた。

「島にも八十八力所があります。狭い島だから、すぐに回れる。石仏も、一力所に数えるんです。七つ並んだら七力所」

美耶子さんはそう言って、道ばたに咲き乱れる彼岸花を一本折った。

美耶子さんが彼岸花の真つ赤な花びらをくわえた。

「地下茎にはリコリンと言う毒がある」

僕が言う。

美耶子さんが彼岸花を投げた。

「ああ、死ねたらいいなあ」

美耶子さんは歌うように言った。

塩釜神社の境内はシンとしていた。でも人のいた名残がある。祭りの準備のためだろう。雑草が引かれ、玉砂利に筭の目があった。社は海の方向に向いている。

本殿の裏に湧き水があり、それが溝のような細い流れなっていた。美耶子さんは湧き水を手に受け、飲んだ。僕も手に受ける。手の中に無数のプラナリアが動き始めた。

「鈴木さんはこの島にはプラナリアを探しに来たんだ」

「再生の実験があなたのテーマ」

「俺の……」

僕と鈴木さんはプラナリアのように二つに分かれたのだ。

「プラナリアを半分に切る。二つの個体が再生する。どちらがあなたなの？」

また、美耶子がわき水を手に受け飲んだ。

「島には川は一本だけ。それも濁っている。気候も暑すぎる。プラナリアなんて一匹もないよ。それに、島に着くなり、プラナリアなんてどうでもよくなつたって、あなたは言ってたわ」

「……」

「いるじゃない。こんなにいっぱい」

役場に行く美耶子さんと別れて、僕は八浦に戻った。

砂浜に老人がいる。新吉老は海を見つめ、大声で歌っている。

砂浜に蟹を見つけて、追いかけたり、海で跳ねる魚を眺めたり、突堤に入る船をぼんやりと見ていた。時間は打ち寄せる波のように次々に消えて行く。また、次々に生まれてくる。繰り返される生と死も同じようなものだろう。自分が存在する事がとても不思議だ。僕は死に続け、同時に生き続ける。次々に死に、次々に再生する。

海辺に沿って、あてもなく歩いた。釣り人の姿を時々見かける。立ち止まり見物するが、なかなか魚は釣れない。また、歩き始め

る。いつの間にか家は途絶えている。カーブを曲がると、巨大な採石場に出た。垂直に立ち上がる石の壁。途中でクレーンが一台止まっているが、作業をしている様子はない。目をこらすか人影はない。昼休みなのか、それとも打ち棄てられているのか。

採石場を過ぎると、家がポツリ、ポツリと現れ始めた。中には崩れている家もある。しばらく行くと、道沿いに雑貨屋があった。板張りの店で、やっているのかどうかも怪しかった。硝子戸を開けると、中は薄暗かった。食品、日用品が雑然と置かれたいた。店内は薄汚く海の水を含んだように湿っていた。人の姿はない。食品を手を取ったが、賞味期限が切れているものが目立った。パンを探したが見あたらなかった。カップヌードルを一つ手に取った。

かすかに人の気配がした。棚に隠れているが、店の隅に、人がいるらしい。棚を回り込むと、テーブルがあつて、六十がらみの男がテレビを見ながら、飯を食っていた。ちらりと僕を見たが何も言わない。冷蔵ケースには肉と一緒に缶ビールが入っている。チューハイもある。

「お湯をもらえますか」

男は驚いたように僕を見た。カップヌードルを見せた。男は無言でポットを僕の方に押した。頭を下げると、空いている椅子を足で蹴った。ここで食べるという事か。湯を注ぎ、三分間待つ。男はテレビを見ている。僕も一緒にテレビを見た。古い番組が映っていた。確か、「必殺仕置き人」。男は黙って、熱心に見ている。コマールシヤルになると、抜けた前歯の間にはさんでショートピースを吸った。カップヌードを食べる。意外に美味しい。賞味期限はとつくに切れているのに。

「茶を飲むけ」

男は言った。僕は頷いた。

「採石場には誰もいませんね」

「中国や韓国からようけくるけ。さびれるわな。昔は若いもんもようけおつたけど。今は、殆どおらん。人が減ったら、ものも売れんわ」

男は茶を啜り、また、煙草を吸った。太鼓の音が聞こえた。

「祭りが近いけ。若いのが五人ほど帰つとる」

缶ビールを買って、店を出た。

浜に四、五人の姿がある。二人が大太鼓を叩き、間に挟まれた女が小太鼓を二つ叩いている。みんな若い。

僕は、砂浜に腰を下ろして、ビールを飲みながらその様子を見ていた。太鼓の音は海の音と混じり合った。目を閉じると、太鼓の音が海の音だった。嵐の海、静かな海、月が上がる海、日が沈む海。

行く当てもなく彷徨い続ける海。全ての命が生まれ、全ての命が死んでいく海。胸が一杯になり、一筋、涙が頬を伝った。訳もなく泣いている自分が海と解け合った。

目を開けると、獅子が舞い始めていた。それはやがて二匹になり、太鼓に合わせて激しく舞った。

つかのまの履気楼のように若者達の姿が消えていた。僕は立ち上がり、海に向かって携帯電話を投げた。

砂浜の影が長くなる。山の端に、日が落ちる。カラスが、墓石にとまっている。クアアと啼いて、夕日に向かって飛んだ。

日が落ちると、水島の火が見えた。この光景は見た事がある。車窓に浮かび上がった光景だ。膝小僧を抱えて、僕は見ている。闇になると、波の打ち寄せる音がはつきりと聞こえ始めた。

「遅くなって」

振り向くと、美耶子さんが息を切らして立っていた。

山の中腹で、明かりが揺れた。僕の視線を美耶子さんが振り返った。

「合図。誰かがやってくる。時を超えて私に会いにやってくる」

僕は砂を払って立ち上がり、その言葉の意味を問い返す事もなく肩を並べて歩いた。

美耶子さんは山を振り返った。明かりはもう見えない。山も闇に溶けた。振り返ると、真つ暗な海。その海から、誰かがやってくる。それは分かる。

家に入ると無言のまま抱き合った。僕に抱かれて、女は目を閉じた。

「眠い。あなたも」

軽い寝息を立てた。

「眠り、どんな夢を見たって自由。眠っている時が一番幸せ」と、女は言った。

「君は今眠っているの？」

と、僕は聞いた。

「そうよ、私は眠っている」

そして、女は付け加えた。

「あなたも」

女は土間に下り、引き戸を開けた。そして、門を抜ける。僕の視界から消えたはずの女が見えた。細い道を上がっていく。僕の前に

は庭がある。現実が二重写しになる。僕は体を横たえる。古い柱時計の秒針が止まった。

僕は民宿の老婆の言葉を理解した。

視界が開け、巫女は畑の中を歩く。海に注ぐ小さな川を横切り、「老」と書かれたいろは石の側を通る。乳母車を押す老婆に出会う。頭を下げる老婆を、飄然と無視する。

山道を上がる。木々の間からもれる日の光が、巫女の白い服を柿色に染める。

家が見えてくる。門から入る。この家と同じような造りの門だ。数人の老人たちが彼女を迎える。飄然と無視する。

隠居部屋は門の左側。さーと、障子を開ける。中に入った巫女は、また、さーと障子を閉める。老人たちは、手を合わせる。六畳の部屋に老婆が寝ている。

老婆が両手を合わせて、彼女を見る。

「ありがとう。忙しいに」

巫女は老婆の枕元に座る。

「今度生まれる時も、やっぱ、島がええなあ。わしは、海が好きやけん」

6 入れ替わり

目覚めると美耶子さんはもういない。庭に下りて、井戸の水で口をゆすぎ、塩で歯を磨く。顔を洗う。便所にはいる。僕の排泄物が美耶子さんの排泄物の上に落ちていく。

用意された朝食を取る。玉子がついている。八十吉爺の真似をして、飲む。ゆっくりと玉子は食道を通り、胃に落ちていく。少し冷めた味噌汁を飲む。辛漬けとごはんと一緒に食べる。辛漬けは、島の何処の家でも作っていると美耶子さんは言っていた。胡瓜、茄子、冬瓜、それぞれの家に味あるという。素朴な味だ。辛漬けでもう一杯ごはんを食べる。

食事が終わると、土間に下りて、食器を洗う。丁寧に洗う。時間は十分にあるのだから。

物置で釣り竿を見つけた。釣りは殆どやった事はないが、竿を持って海へ出た。竿をそばに立てて、ぼんやり海を見ていた。蟹が這っていたので、それを潰して餌にした。2秒間、蟹に合掌して蟹の冥福を祈った。一瞬にして叩き潰されるとはどんな気持ちだろう。

浮きはピクリとも動かない。

夜になると、美耶子さんが帰ってくる。魚や肉を持って帰る。黙って晩飯を食べ、その後、一回だけ、静かなセックスをする。そして、眠る。

三日間はおおよそそんな感じで過ぎて行った。

ふつと目が覚めた。唇に冷たい感触があつた。美耶子さんは唇をそつと離れた。蜘蛛の糸が二人の唇を繋いだ。

「行こう」

美耶子さんは言った。僕は黙って服を着替えた。午前一時。いつもは夢の中にいる時間だった。外は闇夜。美耶子さんの姿も見えない。

「大丈夫、私は見えるから。この島のどんな道も」

近くで彼女の声がした。彼女の手が僕をとらえた、そして、軽やかに駆け出した。僕は彼女の手で導かれ、闇の中を駆けた、目が見えない人のように導かれて。

「いろは石の「う」は浮き世」

「八十八の石仏もいるよ。江浦には18体、おられる」

立ち止まる。僕の掌に石の感触が生まれる。その上に美耶子さんの掌が重ねられる。

坂を上がり、急に下る。遠くの一層暗い闇は、海だろうか、山だろうか、空だろう。

「村中を走るね。一筆書きみたい」

息が切れた。でも、奇妙な恍惚感が体を貫いた。繋がれた手の先に、温かい肉体が踊っている。

やがて僕らは海に出る。闇の中で波の音が大きくなる。

二人は長おびの家を目指した。何も言わないが、分かった。海に少し光が宿る。女の横顔が浮かび上がった。女はほほ笑んで僕を見た。

山道にはいると、また、急に闇が深くなった。

急に僕らは立ち止まった。目の前に長おびの家があつた。僕らは抱き合った。何故か止めどなく涙が流れた。とても懐かしいものに出会ったように。

門には鍵がかかっていない。

「島では誰も鍵をかけないわ」

と、美耶子さんは言った。

庭を横切り、ゆつくりと、玄関の戸を開ける。ここも鍵はかかっていない。土間から、磯吉爺が眠っているのが見える。上がり框に足を乗せた時、磯吉爺のからだがちちらへ向いた。

美耶子さんが、スーと、磯吉爺の枕元に忍び寄った。そして、磯吉爺の首に短刀を突きつけた。

「どうしたな美耶子、怖い顔して」

磯吉爺は笑いながら言った。

「今晚は」

美耶子さんも笑った。

「ようきたな」

磯吉爺は僕の方に向かって言った。僕にもかまってくれて嬉しかった。

「今晚は」

僕も挨拶をした。

「ああ、おいでませ」

僕は、仏壇の抽出から、鍵を取り出し、座敷牢の襖を開けた。影が飛び出してきた。同時に僕の背中が突かれた。僕は座敷牢の中にジャンプした。振り返ると、三人が僕を見下ろしていた。

「ホッ、ホッ。これでわしものうと生きれる」

磯吉爺が笑いながら言った。鈴木さんと美耶子さんは寄り添うようにして僕を見下ろしていた。そして、ピシヤリと音を立てて、襖は閉められた。真の闇の中に僕は閉じこめられた。

「開ける」

と、声の限り叫んだが応えるものは何もない。

暗闇に目が慣れてくると、牢の奥と左は壁で右側には格子が嵌っていた。廊下を隔てて、障子あり、その向こうは庭だと思う。時々、カサカサと音を立てるものがある。一瞬部屋の隅を走った。鼠のようだ。

障子から明かりが入ってくる。夜が明ける。少しずつ明かりが増す。障子に桜の木の影が映る。枝がさわさわと風に揺れる。

襖が開いた。老婆が僕を見ていた。梅婆だ。

「おはようさん」

殆ど二つ折れに腰が曲がっている。入れ替わった事に無頓着だ。知らないようにも思える。

脚の着いた一人用のお膳を中に入れた。魚の干物、生卵、辛漬け、美耶子さんの家の朝食と同じだ。八十吉爺の朝飯も一緒にしているらしい。居間にも一人用のお膳が見えた。八十吉爺の姿はない。梅婆は土間に下り、飯と味噌汁を運んでくる。

「毎日同じようなもんで悪いなあ」

目の前に尻からぺたんと座る。

「昨日は船長が帰ってきて、えらいこつちゃった。盆踊り。聞こえたけ」

僕は食べながら頷く。梅婆は茶を入れて差し出す。僕は格子から手を伸ばして受け取る。

「盆踊りやて、時期外れもええとこや、祭りが近いいうに。大金持

いうても、みっちゃんが稼いだんや、息子はえろうない。みっちゃん
んは、車いすに座って、息子の馬鹿騒ぎをじーと睨んどったやけ
ん」

梅婆は口に手をやり可笑しそうに笑う。

「船長はほんま音痴や。上手い上手い言うて手を叩いたら、10ペ
ンも歌いよった。島中の味噌が腐ったで」

ほっほっほと、口を隠して笑う。そんな様子が可愛い。八十吉爺
が土間に入ってきた。

「うるさい年寄りが来よったけ」

そう言つて梅婆は、どっこいしよと立ち上がつて、襖を閉めた。

それから一時間ほどして、アシユラが襖を開けて入ってきた。腰
のあたりがおかしい。奇妙な歩き方をする。多分生まれつきの奇形
なのだろう。

干物の骨を不味そうに食べた。きれいに食べ終わると音もなく出
て行つた。信じられない事に、襖をキツチリと閉めていった。

便所の穴は深そうだ。落ちれば出てこられないかも知れない。こ
こからの脱出は悲惨だ。それよりも、脱出自体に気が向かない。逃
げたところで、島だ。投げやりな気持ちになつて、眠りに落ちた。

三章 再生

1 切つても切つてもプラナリア

K大に行つた日は、最終電車に間に合わない。動物舎に泊まる。
Kが死に、動物もいなくなったプレハブは、ベッドと冷蔵庫と、テ
レビが残っていた。パソコンは誰かが持ち出していた。冷暖房の必
要のないこの季節は、快適な娯楽だった。

あれから直ぐに僕は警察に電話をした。少し時間が経っていたか
も知れない。その僅かな時間で彼は死んだのかも知れない。

遺書があった。パソコンの壁紙に書いてあった。丸出だめ夫の吹
き出しに。

「僕はいつも自分が存在する事の恐怖に怯えていた」と。

それが遺書だと気づいたのは多分僕だけだった。僕も彼は本当に
存在したのかと思う。現実には、Kは偽名だった。身よりも探しよ
うがなかった。大学は事後の事を警察に丸投げした。T大出と言う
事も分からない。問い合わせたが該当者はなかった。元々偽名だつ
たんだから当然だが。

僅かの人々の記憶という、手触りのない物以外は、彼が生きてい

た証拠は何もない。助手仲間で簡単な通夜のまね事をした。骨になつたKに手を合わせた。骨は警察から一晩借りてきた。明日、僕が返しに行く。

誰もKについては何も知らなかった。その時、
「何んだこれ」

生薬の助手が部屋の隅で見つけたのは、B5用紙ほどの大きさで深さが5センチほどの透明なプラスチックの箱だった。蓋はない。

「亀でも飼っていたのかなあ」

物理化学のM女が言った。結婚願望なのに見事に行き遅れている。

容器の中に水が半分ほど入っている。それと大小の石が10個。

「これは箱庭みたいなもんだ。石と水で川を表しているんだ」

有機がいつもの知つたかぶりを披露した。

「そうか」

生薬の助手が感心している。

「子供のおもちゃにもらおうか。夜店でミドリガメを飼ってきてね」

誰かが僕の後ろで言った。

「ダメだよ、あれ、でかくなるよ」

僕は慌てていった。

水槽の中に生き物がいるのを僕は知っている。誰も気づかないのだ。

結局は誰も持って帰らなかった。僕がK大の実験室で密かに飼い始めた。プラナリア。

「何もいないじゃない」

僕には何も見えなかった。

「よく見てよ、先生」

Kが言った。

石の間から、黒いものが見える。

「これ？」

指さしてみる。

「うん」

Kが頷く。

「ミミズ？」

「違うよ、プラナリア」

「プラナリア？」

頭が三角だ。鈴木さんのノートにあった。

「小さいね」

「そいつは再生中だ。大きいのもいるよ」

よく見ると、ざーと数えて20匹ほどいる。石の色とよく似ていて、見分けにくい。長さは1〜2センチで頭が三角形だ。鈴木さんのノートにあったのと同じだ。Kが石をひっくり返すと、「あれっ?」ってな感じでノソノソと動き出す。

「薬理?」

「薬理じゃないよ。僕の趣味。取ってきたんだ。日向さんがチャットで言ってたから」

「そんなの言ったかなあ」

「言ったよ」

「何処で?取ってきたの」

「秘密。1つぐらい自分のものが欲しかったから。誰にも言うなよ」

「言わない。虫の事は無視」

「虫じゃないよ先生。動物だよ」

虫と動物。人間と動物。動物と植物。僕らの会話は正確なものではない。多分。

「ネットで調べたんだ」

Kは言った。

「20匹ぐらい取ったよ。その中で一番の奴以外捨てた。大きさを選んだんじゃない、生命力かなあ。そいつは小さい方だった。それ以外は全部川に返した」

僕は改めて水槽の中を見た。

「一匹だつて」

「そうだよ一匹だよ」

「一匹が」

「全部、僕で他人なんだ。僕は1人で、同時に無数」

「何だよ、それ」

Kは僕の眼を見た。いつもは逸らすのに。

「切っても、切ってもプラナリア」

「科学で遊ぼう4〜岩波書店」

「切っても、切ってもプラナリア」

「子供向けの、理科の本」

「残酷な本だね」

「そうだね。生と死を遊んでる」

僕らはとても大事な事を話している。

「遊びじゃないよ」

Kは笑いながら言った。

「プラナリアを切る時、震えた。殺す。二つに切つて、そのまま動かなくなる。生と死。僕の指先にかかっている。そのうちにね、生

も死も同じだと感じた」

僕とKは黙ってプラナリアを見つめた。水溜まりが川になって流れた。陽光が水面に光った。その瞬間。

「動いた」

僕は思わず口走った。

「そう、動いた。同じなんだよ、先生。僕らと」

しばらくKは黙った。そして、何を決心したように立ち上がった。

「切ってみようか」

小さな箱を持ってきた。

「道具は全部ここに入れてあるの」

蓋をゆっくりと開ける。多分解剖していた時と同じ手つきなんだろう。ふと、そんな気がした。彼の指は細くて長い。

「カッターナイフ、シャーレー、濾紙、スポイト、ルーペ」

一つ一つ丁寧に机の上に並べている。次に冷蔵庫から発泡スチロールのお皿を出してきた。

「水を張って凍らしてあるんだ、プラナリアを麻酔する。タコ焼きのお皿だよ」

お皿の上に濾紙をしく。

「プラナリアを冷やすんだ。動かなくなる。麻酔だね」

シャーレーに容器から水を取る。次に容器からスポイトでプラナリアを吸い取る。

「ここが一番難しい」

2人は息を詰めた。濾紙の上にポトンとプラナリアが落ちた。少し動いたがすぐに動かなくなった。簡単に麻酔が効いた。

「3つに切るね」

Kが真剣な目つきで小さく言った。虫眼鏡で見ながら、カッターナイフで切る。きれいに3つに切れた。濾紙ごとシャーレの水につけて、ジャブジャブする。

水に戻した途端、破片たちが動き出した。傷口もみるみるうちにふさがっていく。頭だけのプラナリア。胴体だけのプラナリア。尾だけのプラナリア。

「12年もののウイスキーがあるんだ。飲む？」

器具を丁寧に片づけながらKは言った。

「いいの？」

「うん」

自分のコップには多めに、僕の方には少なめに水割りをつくった。そして、意味もなく乾杯をした。

「眠っていると、水槽の中にいる夢を見るんだ。無数の僕に囲まれている。どれが僕なのか分からない。また僕が2つに切られる。そい

つも僕の中に紛れてしまう。その僕も分からなくなる。全部が僕で、全部が他人で、でも最初は一つだけ」

Kは2杯目の水割りを作って飲んだ。

「助けてよ、先生」

花子が呻いた。Kは素早く立ち上がった。僕はこっそりとウイスキーをコップに注ぎ、ストレートで飲んだ。サントリーレッドの味がした。

その日から僕は毎日、プラナリアを見に行った。シャーレの中で3つの破片は少しずつだが確実に再生していた。

7日経過。

頭だけのプラナリアたち、体の真ん中に咽頭がはっきり確認できるようにになった。そして全員に眼！

21日経過

3つの破片は見事に再生した。

「元に戻すね」

Kは言った。

シャーレから容器に。

「海に戻れ」

Kは叫んだ。同じ閉じられた空間に向かって。

プレハブに入ると先客がいた。顔に微かな覚えがあった。

「よっ」

と、彼は会釈した。

「鈴木だよ」

「君か」

「今、帰った」

彼は俯き加減に言った。そして、

「俺もここが好きだった」

と続けた。

彼の言葉は嘘だ。ここは動物舎だった。ここにはKがいた。彼の場所はない。でも、言い争うつもりはない。

「一時の秘密の場所だよ」

彼はベットに横になった。理不尽な侵入者はやがて深い眠りに落ちていった。

僕は黙って部屋を出た。

2 カプセルの海

金曜日の一時の秘密の場所はシャッターが半分下りていた。中に

まだ2、3人いるようだ。店の外に出ていた顔見知りの店員が僕を見て

「いいすよ、一杯ぐらいなら」と言った。中に二人いた。連れではない。一人は泥酔していた。一人はボーとしていた。僕はウイスキーを頼んだ。出来るだけ速く酔いたかった。携帯電話が震えた。

「海へ カプセルホテル「海」 地下鉄××西出口 歩いて5分
一泊2500円」

大量に撒かれるメール。その中のいくつかは、この時間都会を漂流している者に届くのだろう。

「さん、閉店だよ」

店員が、泥酔者の肩を揺すった。

「ここは何処だ」

男は言った。

「家は近いの？」

ボーとしていた男が言った。

「知らないすよ」

「だって名前を言った」

「誰だっでもいいすよ、適当で」

「名前なんて、紛れてしまえばみんな一緒だなあ」

ボーとしていた男が言った。

僕は海の中にいた。無限の海。微かに風の音が聞こえる。目を閉じても海は消えなかった。やがて打ち寄せる波の音が聞こえた。カプセルの中の海は、限りなく深く、限りなく広がっていた。僕は無限に体をゆだねた。僕を遮る物は何もない。

カプセルに封じ込まれた海。

3 祭り

襖は開いている。磯吉爺が朝から酒を飲んでいる。遠くで祭りの太鼓が聞こえてくる。

「盆やいうても、誰も帰ってこんだ。先祖も帰るいうに。祭りもそ
うや」

体を小さくして誰に話すともなく言った。

「ああ、お前がいたのお」

磯吉爺が銚子と猪口を持って、座敷牢の前に座る。

「飲むか」

猪口を差し出す。僕は磯吉爺を睨む。

「憎いかわしが」

僕は猪口を飲み干し、素早く猪口を磯吉爺めがけて投げる。磯吉爺がひよいと避ける。

「ほっほ、ポールヤ」

笑うが、目は笑っていない。

「灯笼流しを見に行くか。お盆のクライマックスや。とっくに終わってしもたけど。二人で行けばまた始まるけ」

「行かない」

「そうけ」

祭りの囃子と太鼓が止む。それに代わるように、盆踊りの囃子が聞こえてくる。季節も夏に戻る。

浴衣姿の少女の美耶子が、息を切らして、土間に駆け込んで来た。

「じっちゃん、灯笼流しが始まるけ」

「今年も、新仏がふたつ出たけ、灯笼流しじゃ。わしも何れ流されるけ。お前もじゃ。時の流れは速いけ、あっちゅうまや。みんな海へ帰っていくや。お前も行くか」

磯吉爺が立ち上がり、鍵を持って戻ってきた。

「逃げられんよ。海がお前を逃がさんよ」

美耶子と手を繋いで、浜辺に出た。村人が沢山集まっている。しまの中で灯笼に灯りが入った。人々のざわめきが波の音と混じる。灯笼はしばらく波間に漂いながら、ゆっくり沖に流れていく。

「潮が満ちたら、海へ帰るけ」

誰かが言った。

小一時間ほどして二つの灯笼は、月に向かうように小さくなって、やがて消えた。

4 亜里砂

襖が開いた。鞆を抱えた美耶子が僕を不思議そうに見ている。僕が体を起こすと、軽やかに身を翻した。

一日に一度はやって来る。何かを伝えたい。でも、伝えるものがあるのか、二人とも分からない。ただ、しばらく見つめ合い、お互いを確認して、別れる。その繰り返しだった。

美耶子が出て行った襖の間から、人の姿が垣間見える。八十吉

爺、村の男、女。彼らの声と、時々僕の方を盗み見る目。

やがて、居間には八十吉爺だけになったようだ。彼はゆっくりと立ち上がり、電球のスイッチをひねった。カーキ色の明かりが部屋を染める。

彼は黙って襖を開け放した。戸を開けて女が入ってきた。大きな荷物を提げている。見た事もない女。なのに、懐かしい気持ちがあった。

「名前は？」

「亜里砂」

「どんな字書くんや」

「アジアの亜、りは里、さは砂」

「ハイカラな名前のう、ほんで、祐介は何時帰るんや？」

亜里砂は下を向いた。

「逃げてるんやろ。昨日警察が来たで。子供が戦争ごっこしよつて。あげくは、仲間内で殺し合いか。平和やのう。結構なこつちや」

「平和じゃないです」

亜里砂が八十吉を睨んだ。

「あんたは怒った方がきれいなあ。まあ、議論してもしやない。隠居部屋つこたらええわ、ばあさんが死んで、物置になつとるけ、掃除はせないけんが」

亜里砂は頭を下げた。そして、ふと、僕の方を見た。

「あの人は？」

「あれは気にせんでええ。狂ってるけ」

亜里砂が、居間上がった、僕に近づいてくる。格子から、手を差し入れ、愛おしそうに僕の顔をゆっくりと撫でる。すーと、磯吉が亜里砂の背後から近づき、亜里砂の襟首を掴んで引きずった。同時に、襖が音を立てて、閉められた。

僕は多分病室にいるのだろう。医師は妻に説明する。

「彼は座敷牢に閉じこめられていると思ってるのです」

たとえ真実がそうでも、今の僕には無縁な世界、すなわち時間である。今、そして、ここが現実である。それが全てだ。あなたの場合も、きつと、そうだ。

夕飯を食べると、いつものようにアシユラがやってくる。手を伸ばして、頭を撫でようとすると、ふっと息を吐いて、その体からは信じられないほど素早く毛を逆立てて、僕の手から逃れる。

南天の木にヒヨドリが来た。鋭い啼き声に目が覚める。障子に鳥の影が飛ぶ。

10月 日。祭りが近い。

蛇が天井から落ちてきた。2mはある。僕は部屋の隅に吹っ飛んだ。蛇ほど嫌いなものはない。

蛇が狙っているのは僕ではない。隅で魅入られたように動けなくなっている鼠だ。蛇が素早く動いた。ザーと言う音がした。鋭利な

音だ。

「逃げる」

僕は叫んだ。蛇の口が裂けたのは一瞬だった。命が命を食らう。鼠の尾が激しく動く。静寂。凍りついたような静寂。

蛇はじつとしていた。呑まれた鼠が動きながらゆっくりと蛇の体を下りていく。これは夢だ。振り返ると亜里砂が僕を見ていた。しばらく無表情に僕を眺めた後、静かに襖を閉めた。

その時、誰かの記憶が、僕の中に、そっと、入ってきた。忘れ去られるのを静かに拒むように。

5 残照

体が浮遊して、天井に上がり、窓から飛び出した。起きようともがくが、体が動かない。窓から飛び出した僕は誰かを追っている。幼い僕だ。そう意識する。相手に明確な顔はない。幼い僕は、奇妙な門構えのある家を通り抜ける。闇の中を走る。石の鳥居があり、その向こうに小さな社がある。過去に経験のない場所だ。視覚ではない。意識が風景を作る。網膜の薄い闇が風景を作る。御堂の戸を幼い僕が引く。天井に籠がいた。薄い闇の中に、籠の眼がある。そう感じる。金縛りが解けた。僕は布団の中にいる。

又、引き戻されそうなので体を伸ばす。

はっと、目が覚めると、天井の蛍光灯が目に入った。木の節が人の目に見えた。奇妙な夢の残像がまだ、まぶたの中にあつた。これは誰の記憶だろう。

5月だと言うに、昨日は30度近くまで気温が上がった。

「今日も暑くなりそうだ」

と、独り言。

下宿の開けっ放しの窓からも、風は入ってこない。

昼から、友達にK薬科大学の集會に誘われた。大学紛争の無風地域が集會を開くという。一度行ってみようじゃないかと彼は言った。

それは1968年 10月 日。亜里砂と出会った日。

私鉄の普通電車で揺られて、15分ほど、小さな駅に着いた。

近道を行こうと、友達が言った。よく喋る友達には顔がない。田園風景の広がる中、僕たちは畦道を歩いた。前身は女子専門学校で上流階級の子女が多かったという。

「募集は八十人。だが、補欠入学五百人。入試の申し込み時に、寄付金をするか否か記入する。補欠は寄付金OKの中から成績中に選ぶわけ」

「いくら？」

「八十万円」

「大卒の年収だね」

「そこに教授が絡んだ不正入学が発覚したわけ」

体育館に学生が集まっていた。ざーと、三百人ぐらいか。大人しい集まりだった。昨日までノンポリだった学生が、俺達も学生運動の仲間入りかという風な。

学友会委員長が議事を進める。

「百万円だ。八十万の寄付金はチャラだから、差し引き二十万だけど、寄付金は大学に入るのに、百万円は教授のポケットに入る」

「許せない」

何人かが右手を突き上げた。

「生臭い話だね」

僕は言った。

「イデオロギーがないね」

友達に笑った。

演壇にいる学生の中に、どう見ても学生に見えないおっさんが一人いた。それがマイクの前に出て

「俺は正義のために戦うぞ」

右手を突き上げた。

「誰だあのおっさん」

僕は友達に聞いた。友達は横の学生に聞いた。怪訝そうな顔をしながら僕らを見た後、学生は応えた。

「M教授ですよ」

「へエ、教授が学生の側にいるわけ」

「一番過激なんですよ」

四、五人一緒に笑った。確かに学生運動は、最初は和気あいあいだった。それが段々悲惨になっていった。殺すぞと言ってるうちは後で笑える。本当に殺してしまったら、笑う事はもう出来ない。

突然、短パンをはいた短距離走の選手みたいな格好をした学生が一直線に演壇に駆け上がった。

「村上！」と声が飛ぶ。演壇に駆け上がると、引つたくるようにマイクを握った。数分、彼はマイクを持ったまま固まった。マイクを保持したまま、演壇から下りる時、コードに足が絡んで、転けた。大爆笑の中、すすごと彼は消えた。一時間後、僕らが大学を去る時、夕日を背にして、たった一人でグラウンドを走る彼を見た。

「村上！」と、友達がフエンス越しに声をかけた。彼は一瞬振り向いたが、何事もなかったようにまた走り出した。

集会は中だるみだった。がやがやし始めた。教授が鼻くそをほじくるのを委員長が止めたりしていた。多分これは癖である。小指の第二関節までつつこむ奴を筆頭に後二人を知っている。僕も大欠伸をした。その時、女学生が一人、すっくりと立ち上がった。背の低い平凡な顔立ちの学生だった。

「私は不正入学をしました」

一瞬にして場内は静まりかえった。

「父がS教授にお金を渡した事を認めました。父には罪悪感はありません。私のためにしたと」

すーと彼女は息を吸った。

「私は退学届けを教務に出しました」

「退学する必要はない」

反射的に僕は立ち上がっていた。彼女は僕を見た。

亜里砂との出会いだった。

「君には責任がない」

「私の正義のために、退学します」

亜里砂は僕を睨みつけて言った。

「彼女の勇気ある発言に拍手しよう」

委員長が言った。亜里砂がそれを制した。

「こんなのは勇気じゃない。馬鹿らしい」

亜里砂は吐き捨てた。そして踵を返し、入り口に向かった。

「不正入学が明らかになった」

「S教授を追求しろ」

拍手と、怒号が入り交じった中を亜里砂は真っ直ぐに前を見つめて歩いた。

「彼女の名前は」

僕は学生に聞いた。

「山本亜里砂よ」

背後の女学生が答えた。

「家は開業医」

「どこで」

「S町、眼科。友達いないしね、あの子。いつも一人よ」

S町の山本眼科は電話帳で調べたら直ぐに分かった。

「山本眼科です」

女が出た。

「亜里砂さんいらっしやいますか」

「お家の方に回しますね」

「もし、もし、亜里砂です」

「K大学のTです」

「KだのTだのって、なんですか、それ。切りますよ」

「今日、体育館で、君には責任がないと言った」

「少しの沈黙の後、

「もう終わった事だから」

「電話を切る気配に、僕は慌てて言った。

「戦ってみないか」

「戦う？何と」

「権力と」

「興味がない。切るわ」

「切らないで。明日デモをする。正午。K大学の時計台。もし、気が変わったら」

「少しの沈黙の後、電話は切れた。

「亜里砂はラフなジーンズで現れた。僕を見るなり、

「暇だったから」

「と、素っ気なく言った。そして、チツと唾を吐いた。女が唾を吐くのを初めて見た。

「デモはわりと整然と行われた。僕らを囲むようにしている警官は「道路交通法違反」

「と、馬鹿の一つ覚えのように声を張り上げていた。僕よりもずーと若い警官もいる。中には、友好的な笑いを投げかけてくる。

「デモが解散して、ガード下でラーメンを食べた。その時、昨日見た夢を話した。

「夢の配達人」

「亜里砂が言った。

「誰かの夢を誰かに届けるのよ」

「亜里砂はカウンスターに左肘をつけ、中指の爪を噛んだ。

「みんな独りぼっちだから」

「頭の上を電車が轟音と共に通り過ぎた。何十人という人間が、空気と共に運ばれて行く。隣の中年の男が聞こえがしに呟いた。

「戦争も知らないガキが。遊びにすぎん」

「亜里砂が、また、チツと唾を吐いた。

「真夜中、下宿のドアを小さく叩く音がした。まだ起きていた僕がドアを開ける。亜里砂が立っていた。

「家出てきちゃった。入っていい」

「ああ」

と、僕は答えた。炬燵をはさんで、ビートルズの解散について少し話をした。

「ビートルズは好きじゃないよ」

亜里砂は言った。

「何が好き？」

「ビリーホリデイの奇妙な果実。それだけ」

「Strange fruit」

僕は押し入れの中を探した。乱雑な押し入れの中を見て亜里砂がふっと笑った。

「あつたよ」

僕は安物のプレイヤーに針を落とした。ザーザーと雑音と共に、曲が始まる。

Southern trees bear strange fruit,
Blood on the leaves and blood at the root,
Black bodies swinging in the southern breeze,
Strange fruit hanging from the poplar trees.

Pastoral scene of the gallant south,
The bulging eyes and the twisted mouth,
Scent of magnolias, sweet and fresh,
Then the sudden smell of burning flesh.
Here is fruit for the crows to pluck,
For the rain to gather, for the wind to suck,
For the sun to rot, for the trees to drop,
Here is a strange and bitter cry.

「コーヒーでも入れようか」

「私が入れる」

亜里砂が立ち上がった。僕は女を知らない。どう扱っていいか分からない。友達だと思おうとする。真夜中で二人きりでいる事で息が詰まりそうになる。亜里砂も覚悟しているのではないか。

曲が途切れた。亜里砂がプレイヤーに針を落とした。僕が亜里砂の手を取った。反抗する力はなく、体は崩れた。歯と歯がぶつかった。二人とも震えていた。

「初めてなの、優しくして」

亜里砂が小さく言った。

「僕も」

亜里砂が頷いた。僕はピンク映画で見たベットシーンを思い浮かべながら亜里砂を抱いた。

「コンドームはない」

「かまわない」

「もしも」

「その時は産むわ。電気を消して」
電気を消した。

「ますます分からなくなる」

僕が咳くと、亜里砂が笑った。僕も笑った。

「本当にいいの、今ならやめられる」

亜里砂は答えずに、首に巻いた手に力を入れた。音楽は止み、二人の荒い息だけが残った。長い時間かかり、あっけなく終わった。僕らは闇の中でじっとしていた。亜里砂が下着つける気配がして、また、Strange fruit が流れ出した。僕も恥ずかしいものを隠したかった。電気をつけパンツをはくと、亜里砂は少し泣いた。後にも先にも、彼女が泣いたのを見たのはこの時だけだった。

「好きになれたらよかったのに」

亜里砂は涙を拭いながら言った。

そこには愛というものはなかった。僕は僕であり、彼女は彼女のままだった。

僕は小さな電気炬燵で向かい合って、鍋から直接にチキンラーメンを食べた。

一度の性交で亜里砂は妊娠した。

「私も女だつて分かったわ」

亜里砂は笑った。喫茶店の片隅で僕は共犯者のような気持ちになった。

「産むわ」

亜里砂はあっさりと言った。

「君を巻き込まないから」

レシートを取ると、振り返りもせず喫茶店を出て行った。

気が変わったのか、僕は病院に呼び出された。手続きを済ませて待っていると、

「帰って」

と、亜里砂は言った。

「待っているよ」

「いいの、私の問題だから」

「僕の問題だよ」

「巻き込まないって言ったのにゴメン」

「どうしてだよ」

看護婦が名前を呼んだ。立ち上がって亜里砂はもう一度言った。

「帰って」

長い沈黙の後、言葉を続けた。

「お願い」

僕はたち上がった。そして、逃げるように病院を出た。

僕はその日を忘れない。亜里砂が死んだ日。バリケードの中のフオークコンサート。企画したのは僕だった。ガリ版印刷で演奏者を募った。ピアノ、トランペット、歌手、上手い下手は問わない、飛び入り歓迎、一緒に歌おう。

体育館に入りきれないほど人が集まった。急遽、運動場に会場を移す。何人かが、「休戦」と書いたピラを機動隊の前に突き出した。

封鎖された門を少し開け、機動隊も招待した。

「命令違反になるかなあ」と心配しながら、丸腰の隊員がぞろぞろ入ってきた。

演歌を歌う奴まで出来て大笑いした。「山谷ブルース」、「友よ」。機動隊の一人が「リムジン河」をハーモニカで独奏した。残照が西の空を染めた。

亜里砂がStranger fruitを弾いた。トランペットが入った。音は西の空に吸い込まれるように次々に生まれ、そして次々に消えていった。一度だけ僕の性器と彼女の性器が結合した事、消えた命、それは遠い昔の事のように感じた。

僕たちが生まれる前の記憶のように。

僕は無限を感じた。このまま、全てが止まればいい。

その夜、亜里砂は、大学を抜け出し、家に帰った。家族は総出で迎え、ご馳走を並べた。彼女は何も言わなかったし、家族も何も聞かなかった。彼女を含めて、家族全員が上機嫌だった。亜里砂は飲めないワインにも少し口をつけた。

深夜、浴槽の中で彼女は手首をカットした。真っ白い浴槽は足を伸ばしきれぬほど細長く、清潔だった。

全てが想像だが、多分寸分と違わない。

そして、これは事実だ。ぼくが亜里砂を殺した。

6 帰路

直子からメールが入った。

「今晚、歩が来てもよいかって」

直子からの用事は電話よりメールの方が多くなった。

「OK」

と、返す。

僕は教授室にいる。博士号はK大学で取った。教授が亡くなった事もあった。首寸前の助手が教授になった。

歩が結婚し、孫も出来た。いつの間にか55才になった。

ドアがノックされた。教務主任のTが入ってきた。

「先月の健康診断の結果です」

先月、半ば強制的に受けさせられた。放って置いてくれたらいいのに。死ぬ時は死ぬ。その時はそう思った。

「ポストでいいのに」

「必ず本人に渡す事ってやつですよ。私も胃の再検査です」

「飲み過ぎだろう」

「まあね」

「俺は何だろう」

「健康診断は疑わしきは罰するですから、心配ないんじゃないですか」

Tが出て行くのを待って、封筒を開けた。

「胸部レントゲン写真の結果、精査の必要があります」

印刷された素っ気ない文章があった。

子供並のへたくそな医師のサインがあり、三文判が押ししてあつた。

僕は無意識に胸を押さえた。体の中で異変が起こっていても、不思議ではない年齢だ。

「肺癌の疑いあり」

少し脚色して、直子にメールを送った。

「煙草、吸わないのにな」

何時間も経ってから返事が来た。

直子との距離が少しずつ遠くなっている。仕事中に、今どこにいるのだろうと思う事がある。寝室も別にした。僕のいびきで眠れなかったと直子が何気なく言った事で口論になった。

帰り道、ケーキを買う。駅の雑踏に紛れながら歩く。不意に奇妙な感覚が僕を襲った。階段を群がるように下りる時、それは鮮明な像を結んだ。群衆の中に自分がいない。立ち止まり掌をじつと見つけた。

「これは俺の手だ」

その手が消えた。見えないのと異なる。消える。群衆の中から、自分は確実に消える。それでも、無数の人間は何もなかったように通り過ぎていく。何時かではなく、きつと来る今に。

いつか俺は、今のように立ち止まった事があつた。季節は秋だっ

たと思う。あの時、どこへ行くこうとしたのだろう。

7 K

部屋の隅にKが座っていた。いつの間に来たのだろう。

「なあーんだ、半分はこんなところにいたのか」

ふっふと笑って、

「少し考えれば当然だね」

と、言った。

「どうして来たの？」

「一つの「どうして」には、色々な所をすり抜けてきたんだ。もう一つの「どうして」は僕には分からない」

僕はまた、アシユラが丁寧に魚を食べるのを見た。頭を撫でてやるうと手を伸ばせば、いつものように、ふつと息を吐き、毛をたて、30センチ後ろに飛ぶ。

「理由なんてないのかも知れないね。ふつと、降りた所がここだった。ここは時間の割れ目みたいだよ」

「時間の割れ目か」

「まあ、僕には時間がないから。明日も、明後日も、昨日も、一昨日も、一年前も、一年先も、一〇〇年前も、一〇〇年先も、千年前も、先も、みーんな一緒だよ。すなわち、今という時間がないんだ」

「存在しないという事か」

「そうじゃない。君は僕と出会っている。それに、僕は神様を見る事が出来る」

「神様？」

僕は少し笑った。

「月と海。僕には重さがないから、波と一緒に海へ出る。いつの間にか僕は月の中にいる。海に浮かんだ月の中にね。その時神様を見た。はつきり見えた」

「どんなに」

「はつきり見たという印象しか残っていないんだ。海に浮かぶ月のような。時間が消えていた。何も無い。ありようがない」

二人とも黙った。僕が消えても、月は輝き、静かな海は、無限の水をたたえるだろう。目を閉じれば何も無い。月も海も。そういう事なんだ。

「外に出てみようか」

Kがぼつりと言った。

「外に出る？」

「僕についてくればいい。さあ行くこう」

Kが立ち上がった。

「こつちだよ」

Kが手招きした。壁の中に細い通路が出来た。通路の先にぼんやりとした明かりが見えた。二人はそっちに向かって行った。体が霧状に分散して、通路を抜けていく。振り向くとアシユラがついてくる。

「あの猫は、内と外を行ったり来たりしているんだ」

「内と外」

「そう、世界には全て内と外がある。メビウスの輪のように繋がっている。男と女。生と死。物と影。月と太陽。海と宇宙。存在と無」

やがて、少しずつ出口は大きくなっていく。アシユラが、僕たちを追い抜いていく。出口の明かりの中で、ふっと、消えた。僕らも、出口に踏み入れた。

そこは誰もいない都市だった。高層ビル、高架を通る電車。僕とKとそうしてアシユラだけの世界だった。

「こんな映画見た事がある」

僕が言う。

「ターン」

Kは断言する。

「牧瀬里穂」

僕も反応する。

「彼女の空白の表情が素晴らしかった」

表情を少しも変えずにKは言った。そして続けた。

「日常は殆どが空白なんだね。そこに僕らは存在する」

「ターン」は動物舎でKと肩を並べて音なしのビデオで観た。科白の空白と日常の空白が融け合っていた。存在は意味を失い、時間はターンを繰り返す。

僕はアシユラを抱き上げた。アシユラは大人しくしていた。僕の手の中で、アシユラは、霧のように薄くなり、消えた。

「帰った」

Kが言った。

「僕も帰る」

彼も消えた。僕だけが取り残された。

地下鉄に降りる。轟音を立てて電車が入ってくる。圧縮空気。ドアが開く。車内には誰もいない。僕は中にはいる。ドアが閉まる。僕は一番隅の席に腰を下ろす。ここは内なのか外なのか？窓の外は、暗闇に近いコンクリートの壁。それをスクリーンにして、一瞬、満員の乗客がカットインする。女、男、老人、学生、眠る男、本を読む男。僕は目を閉じる。瞼の間に、人の気配がない。

電車が停止する。僕ホームに降りる。地下鉄××西出口。僕はエスカレーターに乗る。静かに、ゆっくりと浮上していく。

歩道を歩く。体が目的地を知っているようだ。信号を渡り、繁華街にはいる。清潔な街だ。塵一つ落ちていない。デパートの角を左に曲がる。ビジネスホテルが見える。フロントには当然誰もいない。自動販売機が並んでいる。ビール、おつまみ、髭剃り、歯ブラシセット、缶コーヒー、柱の影に、生理用品、コンドーム。

誰かが入ってきた。背中を丸め、誰かに追われるように。僕だ。ずいぶん年のいった僕だ。顔には深いしわが刻まれ、髪の毛には白い物が目立った。彼は僕に気づかない。真っ直ぐにエレベーターに向かう。一緒に僕もエレベーターに乗る。彼はぼんやり空中に目を彷徨わせている。着ている背広は多分ブランドなんだろう。しっかりした生地だ。確かに色は僕の好みだ。襟のところにふけが落ちている。剃りのこりの無精ひげが2、3本ある。鏡に映った年寄りの僕。僕はふつと笑った。彼はその瞬間、少し目が泳いだ。鏡の外にいる僕は変わらないのに、鏡の中の僕はどんどん変容していく。

5階で降りる。駅のロッカーを頭に浮かべて欲しい。一つ一つは、畳一枚程度の平面と90センチ角の空間。それが天井4段、横に10列ほど並んでいる。上に行くための梯子がある。年のいった僕は梯子を上がり、一番上のカプセルに入った。

音がする。耳を澄ます。波の音だ。僕もカプセルの中に入る。年老いた僕は、海の中に浮かんでいる。目を閉じ、揺れている。海草のようであり、小さな魚のようでもある。海の中には、僕と、年老いた僕しかいない。僕は黙って彼を見ている。カプセルは少しずつ変容し、いつもの僕の部屋に変わった。アシユラが格子から出て行くところだった。

波の音。深夜なんだろう。足音を忍ばせて誰かがやってくる。襖が少し開く。亜里砂だ。中に入り、音を立てないように細心の注意を払い、襖を閉める。

「お義父さんに呼ばれたの。これから納戸で暮らせて」
「納戸？」

仏間の横の小さな部屋の事だろう。

「隠居部屋は年寄りには遠いのか」

僕は皮肉っぽく言った。亜里砂はそれに応えずに、しゃがんで僕の目をじつと見つめた。

「親父と何回やった」

亜里砂は黙っている。ふつと笑って、僕の唇を人差し指でつついた。

「殺せ」

僕は言った。

「殺してどうするの？」

「俺と一緒に逃げよう」

「まだ産まれていない子供と逃げるの」

「亜里砂は笑いながら言った。」

「それに」

「亜里砂はゆっくり立ち上がった。」

「殺せば、あなたは産まれてこないのよ」

「美耶子はどうしている」

「美耶子？ やっと、五つになったわ」

「五つ」

「波にさらわれて死ぬまで、後半月」

「亜里砂はチツと唾を飛ばした。」

第四章 月と海と

1 雑踏

朝の通勤。僕はいつもの時間に、いつものように雑踏の中に入る。長距離通勤が堪える。私鉄への乗り換え口に続く駅の巨大な階段。様々な足がコンクリートの階段を上がっていく。足音が響く。コンクリートの階段を上がっていく様々な背中。無数の虫を連想する。規則正しく足音を刻む。僕も無表情に階段を上がって行く。階段の途中で川の流れに逆らう棒杭のように僕の足が止まる。自分がいない風景が蘇る。

振り返ると、顔のない顔が僕を次々に追い抜いていく。何かを振り払うように僕は新幹線の乗り換え口に向かって階段を一気に下った。

小綺麗な公園の近くにある船着き場は直ぐに分かったが、幸丸の姿はなかった。白いクルーザーが横付けにされていた。フェリーの時刻を見てみようかと、思った時、船から声がした。

「幸丸は30分ほど前に出よった」

「しゃれた白い服を着た男が僕を見ていた。」

「フェリーも出た所とこや。夕方までないわ。どこまで行くや？」

「月島です」

「月島のどこ」

「鈴木さんとこです」

「長か。長に何の用」

「友達です」

「昭彦さんのか」

「ええ」

「長も親戚や。わしも祭りに帰るけ。よかつたら乗っていくか。板の下は地獄。命の保証はせんけど」

僕は少し考えた。頑強そうな船だ。船長も金持ちのようだ。

「お願いできますか」

「ええよ」

船長は、ぶつきらばうに言った。

「もうすぐ日が落ちる。もうすぐ中秋の名月や。今年は八浦の祭り
と重なる。その前に船の上で月見や」

船長は舵を取りながら言った。

「その時は船を止める。ええやろ」

「いいですよ」

僕は答える。

「月って、このごろ見ないなあ。空も見ない」

僕は続ける。

「月を見るのに一番ええ場所を俺は知ってる」

静かな海だ。仰向けに寝る。空を独り占めにする。

「おうた時から、思ってたんや、あんた、祐介にそっくりや」

僕は黙っている。

「過激派の仲間割れや。祐介は殺されて、仲間は山に逃げ込んで、
えらい騒ぎやった」

僕は黙っている。

「祐介、お前は自分の葬式に帰ってきたのか」

船長は振り向いて、僕を睨んだ。彼の視線を外し、上半身を起こすと、月はもう出ていた。澄み切った月だ。冷たい月だ。船のエンジン
は切られた。

音のない海で、僕は彷徨う。月と海と名も知らない魚たち。船長
は、煙草に火をつけた。ふーと煙を吐き出す。

「島はええなあ。俺には帰る場所があつて幸せや」

僕はカプセルの中にいる。カプセルの中には無限の海がある。僕
だけの海がある。日が上がり、日が沈む。月が上がり、月が沈む。
誰も僕を捜さない。無限の海で僕は消える。跡形もなく。海に溶け
る。

小さな明かりが見えた。船はその明かりを目指した。突堤の先端
に、女の子がいた。ランプを提げていた。五、六才だろうか。美し
い子だった。

「美耶子、向かいに来てくれたん」

船長が相好を崩した。

「土産もあるけ」

船長は美耶子を抱き上げた。美耶子は、カラ、カラと美しい笑い声を上げた。

「長はあそこの道を上がっていけば、自然につきよる」

船長が指さした。僕は彼に礼を言つて、歩き出した。振り返ると、誰もいない。夜の浜に打ち寄せる波は、時々、白く光った。浜辺を歩く。防波堤の向こうに、明かり一つ見えた。揺れて動いていた。少女のランプだろうか。それに導かれるように歩いた。門を通り、明かりは家に入った。

2 雨

今朝は朝から雨だ。雨の音を聞きながら、梅婆と花札をしている。梅婆は賭け事が好きだ。「おいっちょ」と言つて立て膝をたてる。いっぱしの博徒である。

「かぶ」

僕が言つて、手札を見せると、のけぞつて悔しがる。

一時間ほど遊んで梅婆が帰ると、入れ替わりに、美耶子が入ってきた。手に鞠を持っている。鞠をつき始める。美耶子が鞠をつきながら歌う。

「てんでん手鞠 てん手鞠

てんでん手鞠の 手がそれて

どこから どこまでとんでつた

垣根をこえて 屋根こえて

おもての通りへ とんでつた とんでつた

おもての行列 なんじやいな

紀州の殿さま お国入り

金紋 先箱 供ぞろい

お駕籠のそばには ひげやつこ

毛槍をふりふり やっこらさのやつこらさ

僕は拍手をする。得意げな美耶子は鞠をもう一度ついて、お尻で受ける。

雨の日はみんな暇なんだ。亜里砂は姿を見せない。八十吉爺がずーと家の中にいるからだ。

3 通夜

襖は開け放たれている。土間では、炊事をする村人の姿が見える。外ではヒグラシが鳴きはじめた。

続々と村人が集まってくる。殆どが老人だ。仏壇の前に集まり、長い数珠を繰る。老婆達が御詠歌を歌い始める。何故か男達は歌わない。老人達の間を美耶子が歩く。老婆が美耶子を後ろから抱きしめる。

「美耶子、鶴を折つたるけ」

やがて夜が更け、一人二人と席を立つ。七、八人が車座になって飲み始めた。ああ、この風景かも知れない。

「たくさんいる。車座になって私たちを見下ろしている。海の音が聞こえる」

直子の声が甦る。

また、一人二人と席を立つ。足下のあやしい者もいる。八十吉爺と亜里砂だけが残る。亜里砂が湯飲みを洗い場に運ぶ。八十吉爺は座布団を片づける。

僕を見つけると、

「お前の通夜じゃ」

と、短く言った。そして、土間におり、亜里砂と並んで湯飲みを洗い始めた。居間に、老婆が折つたのだらう、折り鶴が一つ置き去りにされていた。

昨日から、襖は開け放たれたままだった。居間に次々と人が集まってくる。空の座布団があらかた埋まり、やがて、全て埋まった。上がりかまちにまで人があふれた。雑貨屋の主人の顔も見えた。みんな陽気に談笑している。少ないが若い者もいる。子供もいる。祭壇の前に八十吉爺が座っている。経帷子を着ている。黒の群れの中で、一点の白が鮮やかだ。

「男の身内は、墓までは一緒に行くけ、死に装束や。お前の身内は爺だけじゃけん」

梅婆が教えてくれた。ざわめきが途絶える。

「おじゅっさんは丸亀から来よる」

「おじゅっさん？」

「おじゅっさんがわからんけ。毛唐と喋つとる見たいやな。ほれ来はった」

土間から入ってきたのは、少林寺拳法でもやりそうな若い坊主だった。人々が肩を寄せると、狭い畳の通路が出来た。坊主はさつさと歩いていく。読経が始まる。張りのある大きな声だ。

「若いけ。頼りになる。わしらより先に死なれたらなんぎや」

梅婆が呟いた。そして、不思議そうに僕を見た。その時初めて気づいた。出入り口の鍵がない。もともとなかったように。押すと、

抵抗もなく開いた。くぐり抜け、一つ大きく伸びをした。僕が歩くと、人々が肩を寄せる、坊主の時と同じ狭い畳の通路が出来た。祭壇の下を覗くと棺がある。蓋を開けた。

予想していたように中には何もなかった。

振り向くと目の下に沢山の頭が揺れていた。鼻を掻いている者、あくびをしている者、居眠りをしてる者、笑いを浮かべている者、男、女、頭の数だけ世界がある。焼香が始まる。いろんな方向に畳の道ができ、その時は、一様に神妙な顔つきになる。

読経が止む。坊主が、また、できた畳の通路をスタコラと退場する。後ろ姿が、「はよ、丸亀へ帰って、キャバクラでも行こう」と言っている。

棺が引き出され、空の棺に次々に花が入れられる。菊の花が多い。僕がその中に入ろうかとふっと思つた。その瞬間、中に入っていた。にこやかに笑つて、花に埋まる。

釘が打たれ、棺が宙に浮く。土間におり、玄関を抜け、庭を横切り、門を出る時、僕の使っていた茶碗が割られる。

「もう、帰ってきたら、あかんよ」

棺のそばで誰かが囁いた。

葬儀の列は海に向かつて坂を下りていく。僕はしばらく眠る。眠りに落ちる瞬間、かすかに波の音を聞いた。

僕の葬儀が終わり、精進明けの膳が配られる。座敷牢の側まで村人が座る。磯吉爺が立ち上がった。

「アホな死に方しよつて。迷惑かけたのう。何も無いけど、酒はようけあるけ」

「長、^{おん}氣い落とさんと」

一番若い男が声をかける。黒い固まりが同時に頷く。

酒が配られ、宴が始まる。村人の間をこまめに世話をする亜里

砂。少し腹が大きくなっている。僕の前で村人が小さな声で話し合

う。

「殺されたと」

「なんちようかなあ」

「総括じゃろ」

「結局は「赤」じゃろつ」

中の一人が僕を見る。

「お前もそうか」

「思わず言葉が出た。」

「助けてくれ」

「何じゃと、聞こえんけ」

僕は叫ぶ。

「助けてくれ！ここから出してくれ！」

村人達が一斉に僕を見る。亜里砂は、銚子を配る手を止めて振り返った。

「まだ、生きとったんか」

磯吉爺が、床の間に飾ってある、日本刀を掴んだ。同時に亜里砂が磯吉爺の脚にしがみついた。

「放せ」

「いや！」

亜里砂が磯吉爺の顔を見上げる。

「私の子や」

亜里砂が叫ぶ。突然、美耶子が、村人の間から抜け出した。

「美耶子、そっちへ行ったらダメやけん」

老婆が叫んだ。美耶子が僕の方に走ってくる。僕の前で止まり、折り鶴を差し出す。僕が鶴を受け取ると、僕の額を人差し指で真っ直ぐに差す。同時に小さな口が開く。

「殺せ」

何事もなかったように、酒席は続いていた。亜里砂が周りに気を遣いながら、自分の気配を消して、僕に近づいてくる。

「大人しくしてるのよ。きっと、あの子が助けてくれる」

亜里砂の目線の先に、老婆の膝の上で無邪気に遊ぶ美耶子がいた。

僕は海岸沿いに歩いていく。

海の向こうにコンピナートの火が見える。

この光景は見た事がある。

あの時、車窓に浮かんだ。

長い年月をかけて、やっと、来たのだ。

襖が開いて、美耶子が立っていた。僕の目をじっと見つめた。

「もうすぐ、そこまで来てる」

4 海からの逃亡

今日も襖が開いている。この頃は殆ど開いている。居間の様子が手に取るように分かる。磯吉爺がそばに電話を置いて、不機嫌を紛

らわすように酒を飲んでいいる。電話が鳴った。

「丸亀で用事を頼まれた言うてるんけ。嘘つきが、頼んでないけ。嘘じゃ。連れ戻してくれ」

音を立てて受話器を置き、また、酒を飲み始める。亜里砂が逃げ出したのだらう。幸丸の船長が注進したのだらう。

引き戸が開き、思った通り、亜里砂と幸丸の船長が入ってきた。

亜里砂は顔を背けて、チツと唾を吐いた。

「俺は船があるけ」

船長は、磯吉爺の顔から目を逸らして言った。

「忙しいに、わるいな」

磯吉爺が、煙草を一箱渡す。船長は、手を振って辞退するが、ポケットに押し込められて観念する。船長が出て行く。亜里砂は黙っている。

「わしがそんな嫌か」

亜里砂は、それに答えず、ゆっくりと部屋に上がる。

「あいつと同じ牢屋にはいるか。親子で暮らすか」

磯吉爺が僕の方を見る。

「美耶子は？」

磯吉爺が亜里砂の方を見て、尋ねた。

「浜で遊んでいた」

亜里砂が答える。

「こんな日はお化け波が出よる」

「お化け波？」

「風もない穏やかか日に、そうや、今日みたいな日に、化けもんみたいな大きな波が立つことがあるんや」

「内海に大きな波なんか」

亜里砂が笑う。

「ちよつと見てくる」

磯吉爺が立ち上がり、土間に降りた。磯吉爺が、外に出たのを確かめてから、亜里砂は僕の方に近づいてきた。

「見張りがいっばい」

呆れたように言つて、また、チツと唾を吐いた。

「美耶子は、浜の子じゃなかったの？」

「長にもらわれてきた。元は浜屋の子」

「何故？」

「美しい子だったから」

その時、梅婆が喘ぎながら、土間に入ってきた。

「美耶子が」

「やっど、それだけ言った。」

亜里砂が襖を後ろ手に閉めた。

外で何が起こっているのか全く分からない。僕の生活は同じだ。食べて、排泄して、眠る。只、想像する事は出来る。梅婆が食事と一緒に運んでくる事実（彼女の想像も含めて）が僕の想像に彩りと現実感を与える。

浜には誰もいない。点々とついている、小さな足跡。小さな赤い草履が一つ、忘れ物のように落ちてている。

もう一つ、梅婆が話を持ってきた。浜屋に男が住み始めたという。浜屋には親戚はいない。いや、一人いるけどね。どこにいるのか分からないと言う。関わりたくないってみんな見て見ぬふりをしているらしい。悪い男じゃなさそうだし、何か訳があるらしい。それがねえ、梅婆は、話をじらすように黙った。僕も黙った。短い沈黙の後、梅婆は悪戯っぽい目を僕に向けて、言った。「あんたにそっくりだって」

亜里砂が食事を持ってきた。梅婆は風邪を引いて寝ていると言った。

「明日は祭り」

「明日は祭り」。ここに来てから何回も聞いた。何年も経ったのか。わずか数日の事なのか。

「俺を助けてくれる美耶子が死んだ」

亜里砂は味噌汁を椀に入れながら、

「少しの間姿を隠しただけよ」

と、言った。そして、声を潜めた。

「私、島を出る。新吉さんが船を出してくれる。もう会えないかもしれない」

「会えない……」

「いいえ、会えるわ。そうね、あたしはあなたを産むのだから」

しばらく考えて、亜里砂は言った。

「いつ行くの？」

と、僕は聞く。

「今夜。明日は祭りだから、その準備でみんな塩釜神社に集まっているわ。島を抜け出せる」

亜里砂は味噌汁を牢の中に入れながら呟いた。

夜、亜里砂が居間を横切り便所に行く気配がした。用を済ませ、手水で手を洗う。音を立てないように気遣いながら、小さく、雨戸

を開ける。磯吉爺はまだ帰っていないようだ。

庭に誰がいる。僕は耳を澄ませる。

「浜で待つけ」

男の声がする。

「分かったわ」

亜里砂の押し殺した声がする。

「はよせな、海が荒れるけ」

雨戸を閉める音。

座敷牢の襖が開いた。来た時と同じ小さなバツクを一つ提げて、来た時と同じ服を着て亜里砂は立っていた。

「行くわ」

僕は牢の隅で横たわっていた。

「こっちへおいで」

亜里砂が手招きをした。僕が近づき、見つめ合う。亜里砂は僕の手を自分の腹に導く。

「分かる？」

「ああ、動いている」

「あなたよ、あなたがここにいるの」

「これが俺か……」

亜里砂が、僕の手を顔に導く。そして、愛おしそうに、指を口に含む。そして、もう一方の手を胸に導く。

亜里砂は滑り落ちるように跪く。そして、僕の性器を口に含む。

僕は射精する。精液が亜里砂の唇を伝う。亜里砂は上目遣いに僕を見る。

「忘れないで」

亜里砂は言った。

亜里砂の掌で無数のプラナリアが動き始める。

5 月と海と

浜辺の空き家に住み始めて三日経った。夜明けと共に起き、暗闇が深くなると眠った。雑貨屋で懐中電灯と缶詰と食パンと牛乳を買った。これだけあれば生活に困る事はなかった。

村人は僕を見ると、目を逸らす。あからさまに、元来た道を引き返す者もいた。

ブロック塀の向こうに崩れた家が見える。この家もいずれは崩れるのだらう。人が住まなくなると、家は自分から崩れ始める。

幸丸で、丸亀に出て、買い物をして、戻った。行きも帰りも、誰

とも話さない。要る物を指さし、無言で金を払う。船賃も黙って千円札を差し出した。車掌鞆を提げた女も黙って釣り銭をくれた。押し殺したような船室で、僕は波に揺られた。

朝には釣りに出かけ、島魚を2・3匹釣る。夜には玄関の戸を開けて猫がやってくる。腰が抜けたような奇妙な歩き方をする猫だ。土間に魚の骨を放ると、銜えて消えてしまふ。庭で秋の虫がさかんに鳴いている。縁側に腰掛けて、月を見る。

僕は誰かを待っている。もう三日待って来なければ、帰ろうと思ふ。

月に誘われて、浜辺に出る。村人は誰もいない。彼らは朝早く起きて、浜を歩く。墓を巡り、先祖に手を合わせる。畑に出る者、一日中テレビを観る者。野菜と魚の食事を取り、年金と仕送りで暮らしている。そして、日が沈むと誰も家の外に出ない。

海には月が似合う。雲の中に隠れ、また、現れる。天空の雲は動き、月の光は、雲に含まれる。月はいつも荒涼としている。だから海に似合っている。

突堤の先まで歩いてみようと思った。時々見かける夜釣りの人影もない。誰にも会わないのが気楽だった。

突堤に舟があった。チヌの掛かり釣りの舟のようだ。櫂がついている。打ち寄せる波に揺れている。ぼんやりと眺めていると、すと女が舟の中から立ち上がった。白い単の着物をまとっていた。長い髪が風になびいた。

「二十年待った」

女が言った。

女は単の着物を脱いだ。真っ白な裸身が月明かりに浮かび上がった。女は海に飛び込んだ。クロールで美しい魚のように水を割った。水を怖れた魚が月に向かって、見る間に沖に消えて行く。

僕は女が戻ってくるのを膝小僧を抱えて、待った。僕が消えても、月は輝き、静かな海は、無限の水をたたえるだろう。僕は目を閉じる。そこには何も無い。月も海も。

女は砂浜を歩いていった。僕は舟に飛び乗り、着物を拾った。

家に戻り、二人は指を絡めて少し眠った。ランプを一つ点けた。二人とも裸だったが、指を絡めるだけだった。雨になったらしい。雨の音が聞こえた。海も月も消えただろう。

空腹で目を覚ますと、卓袱台に小さな三角おにぎりがあった。ジ

「パンとTシャツに着替えた美耶子が僕を見ていた。雨戸は開け放たれていた。まだ、雨は降っている。外は薄暗いが夜は明けたらしい。」

「何もないけれど」

そう言つて、美耶子は納戸に消えた。

僕は服を着て、歯を磨き、顔を洗う。便所にはいると、竹に夕顔が一輪投げ入れてあつた。花は閉じていたが、香りは残っていた。

一つの証あかしのようだ。

三角おにぎりを一つ食べる。思わず叫んだ。

「鯨の大和煮」

「当たり前！」

納戸で女の笑い声がした。丸亀で仕入れた鯨の大和煮が、おにぎりの中に入っていた。

「美味しい。君は」

モスグリーンのツーピースに着替えた美耶子に僕は言った。化粧

気の全くない顔。透き通るような白さ。深紅の唇。

「先に、一ついただきました」

女は笑つた。

美耶子が役場へ行つた後、雨が止むのを待つて、いつものように釣りに出た。ベラが2匹と、島魚を二匹釣つた。美耶子の分少し多めに釣つた。バケツの中の魚は、突然狭まった世界を受け入れようか、逃げ出そうかと迷っているようだ。受け入れればバケツの中も海になる。

島にいと時間がゆっくりと流れる。釣り竿を仕舞つて、沖を行く船をぼんやりと眺める。今、ここにいる事が不思議だ。だけど、教室にいる僕は不思議ではないのか？孫を抱いている僕は不思議ではないのか？何も分らない。

六十才近くになつても何も分らない。

多分死ぬまでも何も分らないだろう。分からなくて良いのかも知れない。

ゴロンと仰向けになつた。秋の空は高い。海はなぜ青い？空が写っているから。空はなぜ青い？海が写っているから。僕は笑つた。いつの事だっけ。

「今夜、行くね」

美耶子が役場に出かける前に言った。「何処へ？」と僕は聞かなかった。

日が山に沈むと、月が島影から上がってくる。

空には月しかない。月が雲に隠れると闇夜になった。姿を現すと、月は海に映った。波に揺れた。

ラグビーをし、学生と悪ふざけをし、歩の成長に目を細め、やがて、自分の時間がもう少なくなっているのに気づく。終点の印さえ現れている。

「やり直したい？」

と、女は聞く。

「いいや、もう戻れない」

と、僕は言う。

「でも、あなたはあなたを解き放つ。先祖を殺す。今夜、行きましよう。あなたに会いに」

また同じ夢を見た。日が当たっているのに雨が降っている。朽ちた戸を開ける。天井に龍がいる。木目が雲になる。龍が身を踊らせる。稲妻が、雲を切り裂く。鮮明な夢だった。

ふっと目が覚めた。唇に冷たい感触があつた。女は唇をそつと離れた。蜘蛛の糸が二人の唇を繋いだ。

「行こうか」

女は言った。僕は黙って服を着替えた。午前一時。いつもは夢の中にいる時間だった。外は闇夜。月は隠れた。女の姿も見えない。

「大丈夫、私は見えるから。この島のどんな道も」

近くで女の声がした。彼女の手が僕をとらえた、そして、軽やかに駆け出した。僕は彼女の手に導かれ、闇の中を駆けた、目が見えない人のように導かれて。

「いるは石の「う」は浮き世」

「八十八の石仏もいるよ。江浦には18体、おられる」

立ち止まる。僕の掌に石の感触が生まれる。その上に女の掌が重ねられる。

坂を上がり、急に下る。遠くの一層暗い闇は、海だろうか、山だろうか、空だろう。

「村中を走るね。一筆書きみたい」

息が切れた。でも、奇妙な恍惚感が体を貫いた。繋がれた手の先に、温かい肉体が踊っている。

やがて僕らは海に出る。闇の中で波の音が大きくなる。

二人は長おさの家を目指した。何も言わないが、分かった。海に少し光が宿る。女の横顔が浮かび上がった。女はほほ笑んで僕を見た。

山道にはいると、また、急に闇が深くなった。

急に僕らは立ち止まった。目の前に長おさの家があつた。僕らは抱き合った。何故か止めどなく涙が流れた。とても懐かしいものに出会つたように。

土間から、僕と美耶子が居間に上がってくる。座敷牢の中に僕がいる。

「来たよ」

女は叫んだ。

僕は立ち上がる。美耶子を見つめる。優しく二十才になつたのと聞く。女はゆっくりと頷く。

「生まれ変わる」

女はゆっくり、服を脱ぎ捨てる。僕も服を脱ぎ捨てる。格子越しに、僕らは抱き合う。ゆっくりと、二人を距てる格子が消え始める。

「何もなかった」

女が呟く。

「何もなかった？」

僕も繰り返す。

「私たちを遮るものは。遮るものは何もなかった。出会って、愛して、一緒に死ねる」

僕は襖を開ける。磯吉爺が寝ている。目を開ける。

「やっと来たか。待ってたけ。何十年も、お前がわしを殺しに来るのを」

磯吉爺の頬に涙が一筋流れる。僕は床の間の刀をとった。

「今度生まれるときには、そやなあ、夢中になれるものが欲しいなあ」

僕は刀を振り下ろす。

僕と女は手を取り合つて、砂浜を走る。

「龍が海を渡るよ」

女は立ち止まり、空を見上げる。

雲が激しく動く。

二人抱き合う。激しい雨が降り始める。雷鳴。稲妻が光る。

「龍が海を渡るよ」

女が叫ぶ。僕らは抱き合ったまま、空を見上げる。真っ黒な雲の

中に龍の目が光る。稲妻が光る。身をくねらせて龍が現れる。激しく動く雲の間を龍が海を渡って行く。龍を見上げる二人。遠く離れて、その光景を見る村人がたちいる。彼らはひとかたまりになって僕らを見ている。突堤に白いクルーザーが停まっている。

「行こう」

僕は女の手を引く。女は手を振りほどく。

「私は行かない」

「大丈夫、俺がいる」

「私は海を渡れない。島で生まれて、島で生きて、島で死ぬ」

僕らの背後に多数の明かりが迫ってくる。手に鍬や鎌を持った村人達が二人を追ってくる。美耶子が短刀の鞘を抜き払う。僕の胸を刺す。僕はゆっくりと倒れる。

「私たちを遮るものは何もなかった。出会って、愛して、一緒に死ぬる」

美耶子が僕の胸から短刀を抜き、自分の首に突き刺す。僕と女は重なり合うように倒れる。

「二人で海を渡る」

命の源が流れ出す。死に近づきながら、僕は生きようと思った。

了

参照ホームページ

<http://www.t3.rim.or.jp/hyilas/planaria/index.html>

http://www.pref.kagawa.jp/joho/sanuki_seto/hiroshima/hiroshima.htm

参考文献

阿形清和・土橋とし子「切っても切ってもプラナリア」岩波書店

辺見庸・原一男「暴力と狂気」文学界1995・7文藝春秋

安部公房「燃えつきた地図」

ビリーホリデイ「奇妙な果実」

